記　　録

小樽運河研究講座　全10回

—運河の歴史から町づくりまで—

昭和53年12月～昭和54年2月

小樽運河研究講座実行委員会

目　　次

ページ

第1回　「小樽の町の魅力」　1978.12.11. …… 1

講師　倉本　聡（脚本家）
　　守分　寿男（ＨＢＣディレクター）
　　森本　光子（画家）
司会　越野　武（北海道大学助教授）

第2回　「歴史的町並みの保存と再生」　1978.12.19. …… 15

講師　足達富士夫（北海道大学教授）
　　角　幸博（北海道大学助手）
　　倉本たつひこ（建築家）
　　下村　憲一（建築家）

第3回　「小樽運河の形成とその背景」　1978.12.22. …… 23

講師　遠藤　明久（北海道工業大学教授）
　　森山軍治郎（専修短大助教授）

第4回　「地域自立の街づくり　…… 35
　　― 沖縄の街づくりをとおして」　1979.1.8.

講師　重村　力（神戸大学講師）

第5回　「地域での試み」　1979.1.10. …… 49

講師　小崎　隆（映画作家）
　　神南　天翔（舞踊家）
　　国松明日香（彫刻家）
　　佐々木崇次郎（喫茶店主）
　　中島　洋（映画作家）
　　前田　重和（音楽コーディネーター）
司会　佐々木恒治（詩人）

第6回　「小樽の文学風土」　[illegible] …… 61

講師　小[illegible]（[illegible]大学教授）
　　小[illegible]山　[illegible]（[illegible]）
　　[illegible]（作家）

第7回　「環境保全 ― 海辺と水」　1979.1.23. …… 71

講師　神[illegible]　[illegible]（[illegible]）
　　小林　三[illegible]（北海道大学助教授）

第8回　「小樽への提言」　1979.2.5 …… 85

講師　[illegible]（[illegible]）
　　神[illegible]　[illegible]（[illegible]）
　　[illegible]下　[illegible]（[illegible]）

第9回　「続・地域自立の街づくり」　1979.2.16. …… 99

講師　大[illegible]　和[illegible]（地域[illegible]）
　　平[illegible]　[illegible]（[illegible]）
司会　小林　[illegible]（北海道大学[illegible]・
　　[illegible]　[illegible]）

第10回　「小樽運河研究[illegible]」　1979.2.20. …… 113

於　小樽市労働会館

第1回 小樽運河研究講座録

テーマ　小樽の町の魅力

時　昭和53年12月11日(月)夜7時より9時　所　小樽市総合会館

出席講師　倉本　聰氏　竹分勝男氏　森本光子氏

司会　越野　武氏

主催団体（小樽運河を守る会、小樽市の街づくり推進市民会、小樽運河問題を考える会、小樽運河を愛する会、北海道の環境を考える会）を代表して峰山富美が挨拶。講師の方々を紹介して、越野氏にバトンを渡し講座が始まった。

――越野氏

道内人というか、自分と街をくっつけております。買いのが趣味しているのです。身が引き締まっていきんですけれども。話題という大きいかおしいも面で、問題も難かしいですし、[illegible]ものにする話なんですが、[illegible]なかなか答えがないからそこもうまい考えは出てこないんじゃないかと、易をおろして頂くに話題だと思っております。

第1回のテーマが「小樽の町の魅力」ということで、どういう話になるのか、司会としては楽しい人ですが、皆さんの[illegible]で、何とか実を出したいと思ってます。

始めを分析して語るというのは実に難かしい、大変ソフトで捉え所がないわけですけれども、基本的で重要な問題ですから、これからになる人って、何か中身のある話が出来ればと思います。また、既知の自信は余りないのですが、テーマから離れて、どんどん発展して下さっても宜しいんだと思います。

小樽のどういう物がどういう形に魅力的かというお話から始まるのでしょうか、[illegible]ある話ばかりではなく、これからどういう魅力を見出し、つけ加え、或いは作っていくのかというふうにいかがでしょうか。今日ご出席いただいた方は、皆さんが、皆がこんどテレビ、TVを通じて映画作りになるディレクター、その秘密をお客さまに知らせて、まで見えるビジュアルな世界を創ることに目標を置いておられる方々なので、そうした視点からのお話が出れば大変いいと思います。それでは皆さんからお願いします。

―― 守屋氏

町の魅力という事は、色んな立場で色んな事が言えるわけです。私は大学を出て放送局に入って、番組を取材してTV番組を作る仕事をしています。入社して20年やってきまして、何時も自分の中でもたもたさせられる問題が一つある。東京の放送局から依頼を受けて番組を作る場合があるわけですが、その東京サイドでの考えが札幌に住んでいる私にとって抵抗があるわけです。

昭和32年頃は北海道といえばアイヌを取材したい。その次には日本が高度経済成長して餌食がどんどん動いてくると、北海道からかとつへき地の漁師を、それを撮って欲しいと言う。今度は石油ショックになると、自然が大変大事だ、北海道の豊かな自然を、そんな様な要望が多いわけです。

で、東京だけで放送する為に私が取材する場合は、実はこの何年に知床の番屋で生活する老人の夫婦で知床にいったのですが、そうすると番屋に窓がのせてある、知床旅情に流れるような雰囲気を味わうわけです。ところが現実の知床は2百海里後のサケ漁で港を埋っていて、大変豊かな、金が乱れ飛ぶような状況にある。私のマンションなどより数段立派な番屋が建ち並んでる、その中で一軒残っていた古い番屋を撮りながら、これは嘘じゃないかという気が大変してくるんです。

私は札幌に座標軸があって、東京からの要望には抵抗があるけれども、自分が田舎に取材に行く時には、同じ様なまちがいをしているんじゃないかと反省も絶えずするわけです。

それで霧河の話になるわけですが、霧河と倉庫群、その風景や歴史の価値は、僕としては好きだけれども、自分が札幌に居て古い小樽を残せというのは大変に無責任で、言っていいのだろうかというとまどいが大変にある。

つまり大変に役割で繁栄している都会に住んでいて、記憶喪失は故郷には古い物をそのまま残して、観光の材料にしておきたい、そういう一種の植民化、つまりエゴイズムになるんだろうと思うんです。

つまり魅力と一言で言うけれど、その立つ立場によって、ずい分違う形で語られる危険があるという事を、一応一番最初に問題提起しておきたいと思います。

―― 倉本氏

僕は東京生まれの東京育ちなんですが、北海道は非常に好きなんです。で、何時がいいかというと冬が一番好きなんです。そう言うと北海道の人に、それは旅人感覚だって言われるわけです。北海道の冬はんてものは住んでるといいもんじゃない、まだ旅人だからそう言うんだって。で、非常に厳しくてうんと寒い所に住んでやろうと結婚しまして留萌に六年の夏、家を建てて住んでいるんです。で、小樽ですけれど、僕は旅人で小樽を訪れるのが好きなんです。

今度に小樽運河保存のために寄稿してくれ、というのが第一の僕の所に来たんですが寄稿しなかったんです。遠くに居て、ただ単に寄るだけの人間が自分達にとっていい物を残せっていっていいんだろうか、それは無責任な事じゃないだろうかと思ってご返事をしなかったわけです。

僕にですよ、提案をつけないと明日からの生活に困るという人達がいて、何か意見をもってくれと言われたら、僕はそっぽりそっちに意識しちゃうんじゃないかという気もするし。自分自身がたまに来ていいという事だけで保存しようというのは私自身も無責任だと思うわけです。で、最初にお断りしておきたいですけれども、保存派というより、そうした意見を持っているわけではないんです。

但し、私の個人的な意見からいって、その問題を考える時に、文化というものが日本の中で大きな意味を持っている。為政者や経済人には文化というものはどうでもいいやればいいという考え方が強くある。僕はそれを仕事にしているのだけれど、僕にとって住まいを文化というのは環境や自然と同様に、或いはそれ以上に精神的な部分で重要だと思うんですが、その事が余りにも目先で軽んじられている。そういう視点から、何かご参考になることをお話し出来れば、という事で今日来て来たわけです。

―― 森本氏

私、今日ここへ突然ひっぱり出されて。小樽に住まされ育ったのですが、何時も思うんですけど、こんないい所があるだろうかって。

それで小樽に住んでいるんって案外小樽の良さを客観的に見る機会がない。私元々と住居にくるんでおる為に何がつかない事が多いのじゃないかと思います。で、今おエ人の先生が熱意性と好一り作らお話し下さってる事は、私達がもう一度小樽を見直すきっかけになると、そう思い作り聞いております。

最後、個性というかが何度に忘れられる一方で、人間、社会、都市の作り方などから個性が失われていく気がしてなりません。とても悲しいと思います。

霧河、あそこは小樽にとりない無関係なわけで、もう絶対失しならない小樽の個性だと思います。

霧河を残したからといって、小樽市民に明日から豊かさをかり、経済の潤よいになるかっていうとそんなものはないですし、色々な代案もありますし

道路がストップするわけでもないのです。

そこにその小樽よりない空間が残れば、小樽としての都市づくりが、また違った形で小樽市民にプラスしていくのじゃないかと思います。

あの空間が道路になってしまったら、これはもう世界中どこにでもある風景になってしまうわけで、あの空間は絶対に残さなければいけないと、今、確信を持っております。

私、運河を守る会の会員ではございませんけれど、そう思って、今日ひっぱり出されてきました。

――越野氏

僕も生くの外野席ですから、ま、雪谷さん倉本さんの座標軸あるいは第人格だってされれるような方もの、それを余りそれれなくてもいんですが、司会としては、小樽のどういう活がいいかという方をもう少しざっくばらんにしゃべって欲って、出来ればいいかなと思いますけれども。どうでしょうね。

――倉本氏

いいですか、小樽が如何にいいかってもはもう判りきった事だという前提でしゃべらせてください。

東京がだんだん町でなくなっていってるという感じがおそんですね。郊外へ建売住宅がどんどん建っていく。

そうすると、建売業者が悪いのか建築家が悪いのか、建築家の見かた自体にして大変失礼ですが、（笑）

仮に百坪の敷地に4軒の建売が建ったとしますね。ところがこの家たるや1軒が南欧風、1軒が西部劇風、1軒が現代劇風といったように、本当に脈絡なく家というものを建ててしまうわけです。しかもそのスペイン風の家の中に一歩入るとなぜか西部風の部屋があってみたりするわけです。

一つは日本人がそういう家に満足しちゃう、細部も欲しい、あそこで見たああいう壁もいい、あそこにあった暖炉も欲しい。

一生に一度しか建てられない家という物に、まことに優柔に、あらゆる文化をとってくるわけです。

日本人の中から、文化に対する一つのイズムが欠けちゃってる。

それで、供給する側が望まれてるんだからこれでいいんだと。つまり、ここは一つの町なんですという思考方法を全然持たないで建てちゃう。

そういう風にして統一という物がどんどん失われていってるわけです。

長野、北海道も変わったなァと思うんです。札幌もそういう建築がだんだん増えてきて、あの片流れの屋根で手前にタイルがベタベタとはってあるあの感覚嫌ってのは、僕は個人的に全くいやなんです。

[illegible]

で、統一性、[illegible]

[illegible]

[illegible]

んいかがですか。

――倉本さん

やはり景観というものは人間が利用するものとしては、何とおっしゃるか、ある系でていくというか、人のいなくなった荒廃小屋みたいにはっていくんじゃないかと、私思います。

そこで、私いつもね、寄るっていうと私にすごく感謝されるわけです。

もちろんしゃべくばかす会にしゃべくばって、たくばられた感覚なんにもない分だったんです。

感謝はあるていなければ意味がないと思うわけですね。

くたばれ人間がなくて動いていなければ。

「昔の町」で昔話が意味場のもので、何かこうなにをしているのを見て、そうだ、あのおばあさんは昔はなにをしていた、そう思いました。

私たちに今、若い人達がうしかがっているんです。皆さんに「おかしいですわ小樽の町は。年寄りが寄っていって若い人がなくなるんですがよ」ってよくいわれるんですけど。

小樽運河は荒廃にしてしまったら完全に自動車交通にふりかえられて人間がシャットアウトされる荒廃にかっちゃうわけですけど、でも逆えこが残ったら小樽の人がみんな集まってきて、ここをこうしよう、あそこしようって言うだろう。時に若い人達は、もっと考えこを使かしていってくれるだろう、何かそのような希望を持っています。

――感謝を

以前ですね、中央の皆さんからも寄付して頂いて、自由にしゃべり合いたいと思うんですけども、基本的に、小樽の町の見明もどうなるかというかという基本的な問題が抜けていきわけです。観光やり方変えたり、何とか、ほら、

――会場からもロを

いつも僕がそっぱにしゃべることになるんですが、僕は小樽に住んでもう40年で、千町の代表としてしゃべらせて頂いています。小樽へ来てり度々になりますが、最初来て来た時に、人口16万人の都市の中にしては、すばらしい歴史的環境と人の住まいや市町村が残っていることにびっくりしたんです。まあ、多分くらいあるし、一生住みつく決心を固めてやるんです。

先日、TVで都市のコミュニティの話をしていましたけれど、都市というのは色々な人やで経済的に機能するものが人間なわけですけど、そういう機能のいわゆる中軸としての都市ですね、大都市に集中しているわけですけれども、そういうやでの人間の連絡っていうのは社縁的なコミュニティになる。利害の対立っていうのが引離されていくやで、人間が寄り集まって機能していくという感覚の中の寄りでしかない。利害ではない。町ではない。僕もそう思います。

僕はよくなるんですけど、小樽はやる気がなければのるものなってって、何というのはどうというのが思うんです。一つの町の流れのなかで、何故で誰が何をしてるか、イメージがない。

電車のどんどんを動かしてはだめし、そういうやで人間は感覚して、豊かな海の町の数で自信をつくし、何が見て何が彩かが彩られるんになっていくと思うんです。

そういうやで小樽は、私のもとでおかげさんしてやってきて来た。そう思うんです。これが好き勝手しているも明れの前にたった、完全に海と町とを分離してしまう。どうもだめ。

はかりが縦横をおしようかいっぷりは想像つきかけてるんです。すると全体としては、いわゆる文化的として観光がなるんだから観光のほうを強めて欲しいと思う。しかし問題点は観光を通じてしかない。そういうやでなるの流れが一つのフェスティバルの対応と試みしてあると、小樽の流れは自然消滅していくわけです。小樽いい町で住んでいきたいけれど将来に望を託せるだろうか、どんな考えがあるかどうかな、そう考えられる人達が出て来たんじゃないかと思うんです。

しかしこれは大変の時代は、なかの時代、ほっぽっておいたらだめっていうことで、あるにんぶしくなるっていうこの環境、なにいうか、ほっぽい時代に、ちょっとだけ、ずっとにも。

[illegible]

[illegible]

――倉本さん

[illegible]

を何人かかんがえるんだけど、同じ[illegible]という気がするんですよね。

様々な立場としない人の場は見方がかなり違ってきていて、[illegible]、結局[illegible]ないという[illegible]、[illegible]ちゃうのが今迄のこうした[illegible]の[illegible]だったんじゃないかという気がするんですね。

ヒステリックになるのは[illegible]、ヒステリックにならない[illegible]よく話し合う事だと思うんですね。具体的には[illegible]ですが。

で、[illegible]ことを[illegible]とかなってるんじゃないかなって、そういう立場の人間がなってきているんですから、[illegible]ヒステリックにならない[illegible]、[illegible]ちゃうのが[illegible]。

外部から[illegible]したりすると[illegible]ですね。ただ[illegible]と[illegible]という場合に、そういうセンチメントだけで[illegible]ても[illegible]という事を言いたかったんです。

[illegible]小林の町を何とかしようと考えたら、一番[illegible]物をガッ[illegible]ればいい、ただそこには伝統があり文化がある、つまり機能ばかりではなく精神の問題、生活の問題も出てくる。

[illegible]問題からそういう議論するのでは[illegible]の人は困るんですよね。

――[illegible]

[illegible]この[illegible]を企画したのは、[illegible]という[illegible]なくて、[illegible]の方々が自由に[illegible]、そういう事も[illegible]したのです。[illegible]という[illegible]して[illegible]の意味だと思ってますのでね。[illegible]、どうぞご自由にお話し下さい。

――[illegible]

[illegible]、今回のテーマですが、このテーマにはずいぶん[illegible]があるんです。

つまり[illegible]、その[illegible]ばならないし考えるんです。

[illegible]ったら[illegible]ですが[illegible]、そういう[illegible]。

外部から[illegible]したりすると[illegible]ですね。ただ[illegible]と[illegible]という場合に、そういうセンチメントだけで[illegible]ても[illegible]という事を言いたかったんです。

[illegible]小林の町を何とかしようと考えたら、一番[illegible]物をガッ[illegible]ればいい、ただそこには伝統があり文化がある、つまり機能ばかりではなく精神の問題、生活の問題も出てくる。

その[illegible]を[illegible]ていかなければならないのじゃないでしょうか。

[illegible]風景にしてはいけないとすれば、どうやってその[illegible]を[illegible]文化にしていけるか、そのためにこそ[illegible]時間をかけて[illegible]ていかなければ、と[illegible]ているわけです。

――[illegible]

[illegible]、[illegible]食えないという[illegible]があるんですね。

[illegible]ないとまず[illegible]が[illegible]、[illegible]食えないとまいは[illegible]があるんですが、[illegible]。

[illegible]、[illegible]ならないというアリストテレス[illegible]の[illegible]もけれども、[illegible]から[illegible]と[illegible]食えるを、[illegible]食えるんだという気がするんです。

[illegible]、[illegible]センチメントでおれしもきいけないって[illegible]ってその通りなんだけれども、[illegible]センチメントは大事なものだという気が私はするわけですよ。人間の心にとってね。

「しいたけよ」っていう[illegible]暮していてつまんない所でありますよね。[illegible]のタクシーの運転手なんか[illegible]だけれど、たまたま乗ったらヤクザみたいな運転手で、いや[illegible]なタクシーに乗ったなと思ってると、その運転手が後に[illegible]して、お客さん分[illegible]

[illegible]、[illegible]、なんて言ってしまうと、あっちいい人だが、[illegible]、なんて言って、[illegible]ちゃう。

人間[illegible]そういうつきあいの中で[illegible]する[illegible]なんでしょうか。元介は[illegible]でいえば、[illegible]、[illegible]けど、そういう[illegible]人間を豊かにしていくんだと思うんです。

[illegible]が[illegible]を[illegible]気になったのも何かそこら辺にあるんです。[illegible]水[illegible]もしないですむし[illegible]なんですけど、[illegible]で[illegible]を考えていったら、[illegible]だけど、[illegible]が欲しいから[illegible]ビー、でもそれは[illegible]だけどもっと[illegible]ないか、もっと人間の大きな[illegible]分が[illegible]ないかって[illegible]です。

――[illegible]から[illegible]

小[illegible]りもんんすけは、一[illegible]が[illegible]して、[illegible]が[illegible]ていくのが、そういう[illegible]も[illegible]ないと思うんですよ。何年後[illegible]の人間が、[illegible]、[illegible]の[illegible]、しかし時の[illegible]、[illegible]のか、[illegible]なんにはその[illegible]を[illegible]したい。[illegible]なんには、[illegible]の[illegible]、[illegible]、[illegible]したい。

――[illegible]

[illegible]、[illegible]続いてないいうこと、[illegible]、[illegible]、[illegible]

で東京人なんですね。

僕は東京を捨てようとすると下町へいっちゃうんです。今の東京人は江戸っ子ではないと思うんです。

だけど現在の東京も、まあいうものとしていいんだと思ってます。逆に東京人だんだから、それはそれでいいと思うんですけど、という事を逆に言えばお祭りを盛んにするというんじゃなくて、小樽で今生活しているんは、小樽の人なんじゃないですか。

――遠藤氏

ちょっとね、私は言いたいんですが、ちょっとばっかり小樽の人ってなんか非常に性かしい。

――上田氏

ほう、私も貰ったが。

――佐藤氏

なんか重鎮とか関わってくるかもしれません。

――倉本氏

そういう風に言ってくれる。

――佐藤氏

的確なのはそれなんです、経験的なものを作ってきたのに、ここへ来てふてぶてしい若さん達がなんでもあるかもしれない。現在意識で運動はできますが、潜在意識だって大切なんですから、そこで私自身が果たしてこの人達と同じ小樽人なのかな、と思います。

――倉本氏

同じじゃないですかね。もう絶対同じだと思いますよ。

――篠崎氏

お前そうと思い込めと

――遠藤氏

今の事で森本さん何か一言。

――森本氏

小樽人だという意識を持てないのは、小樽に誇りを持つ何かがないからでは、そんな感じはないかしら。

――篠崎氏

そんな事ないです。

――上田氏

それはね、小樽で手伝を持てば（笑）

――篠崎氏

二人います（爆笑）

――遠藤氏

この問題も大事ですが、もう一つ質問が出てますので、倉敷の問題は大変重要なので、野分さん。

――野分氏

最初の質問は、今小樽に住んでいて、自分なりの答で明日の小樽に関わっていく人は、僕は小樽の人だと、絶対はまらがいなく小樽にあると思います。

倉敷に関しては、ある形では生きてると思うんですね。観光地という一つの生き方もあるわけで、それが良いとか、好きとか嫌いとかいう事は別にして、そういう意味で生きていると僕は思うんです。

――会場から対馬氏

今日札幌からの帰りの汽車の中で三人の奥さん達と相席になったんです。

それで話を聞いてたら、10何年か小樽に住んでるっていうお姉さん達が、[illegible]、[illegible]、[illegible]

がたしく続けられてきました。

城や寺社に対した状況がいいてこの小樽地区は、経済的に非常に落ち込い込みのある所為し良いきっかけとなることに魅力する人がを計画的に使っていくことなると同じがとう。[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

分裂する点は[illegible]
[illegible]

〈小林秀雄研究講座
実行委員会〉

代表　岸田　治美

[illegible]小林秀雄研究講座

テーマ　[illegible]

[illegible]　所　小林秀雄記念館

[illegible]　[illegible]氏　[illegible]氏　倉本[illegible]氏

下村[illegible]氏

[illegible]について。

――[illegible]

[illegible]。正しくない[illegible]。

[illegible]

[illegible]の「[illegible]」[illegible]。[illegible]、[illegible]の例[illegible]。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]が[illegible]されているのですが、もう[illegible]で、本、たくさんのプロジェクトが進められています。

イギリス人は保守的な気質が強い民族で、古いものを大事にしという例をたくさんあげるのですが、一方では、ガス次化[illegible]の試験地などで、大胆だいたんな開発などもやっています。

ウクスバンク地区では、劇場、[illegible]、フェスティバルホールなどを全く新しい技術で建設し、一つの文化地区をつくりあげているのですが、これだけでは、このメタイが[illegible]、古い[illegible]船の[illegible]にしたものを、[illegible]復活し、[illegible]にし、[illegible]して使っています。

今はテームで[illegible]を[illegible]いで[illegible]。[illegible]のテームズの[illegible]、[illegible]年に[illegible]が[illegible]ましたが、ようやくそれが[illegible]のが[illegible]だそうだといいます。

この[illegible]には、[illegible]経済の[illegible]、[illegible]によるテームズ川が[illegible]なくなったことを[illegible]わけです。

これはティケンズの二[illegible]の舞台になった倉庫群ですが、命運がなくなったため、[illegible]になり、どんどんスラム化していったわけです。

ルントキャサリンドックという場所で、ドックと倉庫の[illegible]された地域なのですが、[illegible]があります。

解体を続けあって、今は、ほとんど[illegible]を[illegible]、この倉庫に入れていたのが、船の大型化やコンテナー化に伴なってテームズ川下流の港に新設が集中し、ここはそのまま放置されていたわけです。

そこで、ロンドン市当局と[illegible]の[illegible]、それに[illegible]がこの地区の再開発に取り組んだのです。

流通を主とした地区だったのですが、この水辺と古い倉庫を生かして、一流の観光開発を目指したわけです。

ホテル[illegible]を[illegible]入れて[illegible]セクターをつくり、ヨットハーバー、クルージング基地にする計画を現在進めているところです。

ホテルを2棟、スポーツやエンターテイメントの施設などもこの倉庫の外観は残しながらつくっています。

水辺の[illegible]場だった倉庫をレストランに[illegible]し、その[illegible]には、古い[illegible]などを[illegible]して陳列して、自由に見物できるようにしています。

ドックの運河には、消防船や[illegible]船などの珍しい船を浮べ、またこうした古い帆船などを持ってきて補修して実際に使うなどしています。

観光開発ではあるんですがこうした場合でも、定住者を[illegible]計画に入れるのがイギリスのポリシーで、[illegible]ちゃんと計画されています。

定住者がいれることで、夜間の過疎化を防ぐわけです。

今度の例は、同じロンドンのコベントガーデンという[illegible]中央市場だった地区の再開発の例です。

ピカディーサーカスから歩いて[illegible]ないという、いわば[illegible]のすぐ[illegible]のですが、[illegible]。[illegible]は[illegible]で[illegible]、[illegible]年に市場は郊外へ移ってしまった。

[illegible]が[illegible]して、[illegible]になっています。

[illegible]は[illegible]ですが、その[illegible]ドックの[illegible]、[illegible]を[illegible]、[illegible]。

[illegible]、[illegible]。

[illegible]。[illegible]。[illegible]。

[illegible]、主にキモノを扱う商店街として栄えたのです。

運河の岸には倉庫がありまして、今は観光の人達の[illegible]

[illegible]

――[illegible]氏

[illegible]

――[illegible]

[illegible]アメリカ人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

これは都心の皇居の緑地公園ですが、皇居を中心の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遠かしい話ですが、クッタラウシ運上屋と、クッタラウシというのはイタドリの多い所という意味のアイヌ語だそうですが、その運上屋があって明治維新を迎えます。

運上屋は廃止されますが、引き続いて駅逓が出来ます。

そういう事で、当時の小樽の市街はこの入舟川と祝納川の間、出ノ上町、信香町、金毘羅町などが中心だったのです。

で、今のこの金場のあります色内、浅草などは、明治14年以降に町名がついた所で、当時は個人も人が住んでいなかった所です。

小樽の中心は、段々に北の方へと移ってきているという事になります。

昔の絵図にはないのですが、永天宮の先には立岩という岩が、入舟川の沖には一枚岩というのがあったそうで、「一枚岩まで泳げれば一人前」といったそうですが、この辺には岩が点在していた様です。

そこで、こちらに運上屋が移った事に伴ないまして、文久元年(1861)といいますから今から117年位前になりましょうか、エビス屋岡田が初めて出願しまして、この地先を少しずつ埋めております。

永天宮の所では昔は往来できても、明治維新では歩いて渡ることは出来なかった、現在の道路は開拓使の頃に初めて造られたものです。

道路や開拓使が少しずつ少しずつ埋め立てをしまして、港町、塩町というものが出来てゆきます。

明治14年に類焼800戸という当時としては大変な大火があり、そうした事を契機にオコバチ川を越えた北側に市街が形成されていくわけです。

いわゆる維新政府、開拓使が手宮に、海かん所という船の税金をとり、運転をする役所を松前江差から移します。

寿都と手宮のスケ所がこの近在の海かん所になるわけですが、奥地へ入るにはこのどうらかに寄らなきゃならないわけです。

そういう事があって、松前商人、江差商人たちが主として寿都ではなく小樽に移り住みます。

そうして、この現在の中心部に段々人が住む様になり市街地が徐々に形成されていくことになります。

それに大きな影響を与えましたのが、明治20年から26年にかけて行なわれた妙崎町、南浜町、北浜町の埋め立てであります。

現在、石造倉庫の建っています運河の山側のあたりですが、これは林有三という人の出願で埋め立てたものです。

林有三という人は自由民権運動の創始の一人で、初代長官岩村通俊の弟であります。

で、どうもこの埋め立ては当時の開拓政府の利権絡みの匂いがしないでもありません。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まりは一家の団欒を楽しむ人たちだけです。当時小樽には遊郭街がある人口がそうであるが渡辺さんは、経営者の者が遊ぶために、上川、旭川などから小作人の子供を買います。

456人が1605人と、人口で5000人ほど増えたんだそうです。

一番は有効打ですが、数でもめたそうです。なぜそうなったのですが、明治の年に一応の区割をして、北海道はそれより高価ふうとなります。

で、区割事業の終了後は、ふ厚道で明治41年に「道」になるとして許可になります。

ところが、財政の裏付の制度がなくて社会的にはおくれます。

工事が進められないでいる所へ住友さんのが、小樽の設備を作った広井勇さんです。

この広井勇さんというのは札幌農学校の生徒です。北海道開拓使から工部省へ行って、石狩平野の開拓の設計に従事した後、アメリカの設計会社に勤務しました。

そうした経験が認められて帰朝後に札幌農学校の教授、今でいうと北大教授に任命され、直ちにドイツ、ライン、ベルリンの農学校を視察となります。

明治30年から道庁技師となっています。

その広井さんが「ハバロフスク」で「ロシアの進出政策がいま、明らかに表れた」、小樽式ではなく函館式にしました。

何といっても当時の小樽の大繁盛です。その意見が大きく支配していたわけで、当時区会の多数党であった茶話会が、それでは、という事で設計を変更します。

この辺で色々と問題があります。埋立て地が沖へ60間まで出る計画、それでは足りない80間にしなさい。運河の幅員の中は17間、20間、22間。さらに浮ぐ航路の中は15間、17間、等々、数値が相違しているようです。

で、ある方法をもって一応妥協したのですが、直後の選挙で革新クラブが多数党になりました分離式にしたらどうか、などともめています。

で、結局、現在が党になっている様なもので、大正3年3月27日に許可になり、8月28日に着工しています。

工事はかなり進んだ大正7年に多数党の革新クラブが、設計変更をまた言い出します。

築港の化粧の上に当時の市議会議員やっていた広瀬さんとか石井建吉商店さんとかの大資産家が居られます。そこで港内を埋めてしまえ、航路は現在通っている所、あそこはだめだろうとか、港への航路をあっちにも作れ、こっちにも作れ、などの意見が出て、今度は「ハバロフスク」、その計画変更を社会党が通してしまいます。

当時の第6代小樽区長の石井金次郎さんは、区会に出ようか

ようか、止めようか、迷っていたものか、当時は官選の区長で、樺太庁長官に転出します。

そんな事があったりなどしまして、区会での議決がモヤモヤとなってしまい、工事は原設計通り進行して、大正12年末に完工しまして、翌大正13年に防波堤と併せて盛大な落成式が行なわれています。

前にもって申し上げましたが小樽は運河を巡って三度、大変なモメ方をしているわけです。

最初は区営埋立と北海道との境界線。二度めは、運河式か原案の小樽式か。最後に革新クラブの修正案の三度です。

この三度とも、政界、財界、区民全体をまき込んだ、大変な争いだった様です。

運河の山手にある倉庫は明治年間の古いもの、明治という事でお判りの通り、運河の出来る以前のものです。

ここで、どんな風に倉庫が増えていったかをかいつまんでお話しましょう。

文久年間以降に、宝山堀を発見した定山というお坊さんがいますが、この方が高らかに石の供養塔を建立しています。多宮古代文学発見で有名な室伏長兵衛さん、後に石屋の長兵衛さんは石工として有名です。慶応年間に絵図が原から渡ってきています。

幕末からボチボチ石を使ったものが増えてまいりまして明治5年、開拓使が色内に石造の小屋を作っております。

初めて石造建築が建てられたのもこの年で、信者町に渡辺弥三兵衛という人が、祝津町に宮崎長五郎という人が倉庫を建てています。

現存している倉庫では、広海和三郎が建てた、今は日本通運が使っている3寸明治22年のと、もう一つ明治22年の2棟が一番古いものです。

調査によりますと、明治24年には小樽市内の石造営業所名簿は41棟、明治31年には108棟、39年では141棟、41年で171棟というのがピークです。

木造その他を合わせて377棟その内の111棟ですから36%と結んでいたと言っていいでしょう。面積からいっても、全市で約2万坪のうち倉庫の1万3千5百坪はどが石造でした。

倉庫を見た場合は、小樽倉庫ってのは、ほとんどが札幌産ですが、小樽産の石材を使ったものもあります。

祝津、高島、塩谷、蘭島などに石切場がありました。

小樽の石は、黄色味を帯びやや軟質で「ふし」があります。札幌産は灰色で、建材としては良質と思われます。

石造倉庫は年数を経っていますし、火事の後で土地台帳の所有関係が絡わるなど、持主が変わっていまして、記録がなかなか少ないのですが、そのかりになるものに、戦前の

屋号がありました。

// (ナケボンバシ)
　名取紙店前　橋本の
　長角、海運業。

日本郵船

(カタヨセ)　浜本家

(オビシェーゴ)　浜次家

(ヤルシェーゴ)　村山家 (福島商店)

(ヤルシェーゴガミ)　昭口松太郎

(マルシカ)　木村門吉

(ダイヤ)　藤山勝吉

(イロハ)　板橋吉左

(ハチイ)　鶴倉家

(ヤマミツボシ)　高谷源治

(ヤマヤー)　林兄弟商店

大高七平

岡田正三

中村三之輔

藤原孫八

この他にも沢山あるのですが今では覚えている人が少なくなっています。

音はそれで呼ぶことより、イロハさんとかマルジューゴさんと呼んだもののようです。

屋号を調べる事、それがどういう人であるかを調べる事は、同時に小樽の商業の歴史を調べる事です。私など、小樽の商家に生まれ育ったのですから子供の頃に聞いた記憶はあるのですが、余り正確に覚えておりません。もっと詳しく聞いときゃ良かったと思います。

こうした屋号は、函館ではもう分からなくなりましたし、札幌では探そうったって無理です。小樽でしか捉えない事であります。

是非、郷土史関係の方にお調べ頂いて、お教え頂ければ、大変有難いと思います。

今はなくなりました有幌には22棟倉庫がありました、その程お話遠治さんの27棟。いずれも豆撰場だったため背の高い倉庫でした。2階建で、2階で女工さん達が大きなテーブルをぐるっと囲んで輸出用の豆の撰別をしていたものです。

運河は、何といっても線の拡張のために作られたわけです。

大正2年に275隻。大正13年がピークで595隻、乗人夫が1332人いたそうで、大変な盛況を示したという事でございます。

大正13年には小樽港は全国第5位の港で、この頃から昭和4年位迄が全盛期と云えましょう。

初めに申しました様に、運河は計画から完成まで実に28年という歳月を費しています。

ところが、第二次拡張計画に

[illegible]

くれたっていう事は、小樽はかりでなく日本全体の、彼らがこれから歴史を作っていくうえで、どういう態度で臨めばいいのか、という問題に関わってくると思うんですね。

ですから非常に広く深い問題を含んでいると思うんです。

実情は小樽より早く斜陽化しちゃった街でその度合はちょっと先輩じゃないか、という気もするんです。

先程、芝崎先生のお話を聞いていて、小樽はずいぶん金こうけしたんだな、金をうけがばってつかい物になりなくなったら今みたいなことになる。

それは最近に早く問題を感じ取った人達が、市へ人を出すべきだ、と言っていたのが本当に当たると、話と違ってくる、そういう点が非常に似てるんですね。

今は、明治大正の話じゃなく、ほとんどが現代的な課題として考えたいんです。

日本の高度成長の場、60年代、70年代前半は順調だったし、僕らもそれを余り疑わなかった。ところがオイルショックあたりから経済がやせ始めて不況になってくると考え始めてしまった。

不確実性の時代などと言っても確認しているだけで、その中からどうやって確実なものをつかまえるかは、混迷してるんだと思う人ですね。

景観が問題になっても「仕方ないじゃないか、お腹より

[illegible]ものが便利なんだものと単純なレベルで考えてきた。

高度成長は頭打ちになったのだけど、僕らの中にはまだそういうのが残ってる。

便利になる、効率的になるのがいい事だっていう風に。

価値観や発想の転換をまわれをる、するする来ているのが日本の現状だと思うわけですね。

発展する条、経済成長する中、人口が増えるとか、豊かになる、活気が出る、という流れ中は便利率制を問わずいい事だと思ってるんですね。

それは悪してそうなんだろうか、僕は考えたわけです。

産業でいうと、次々に発展していくのは工業とそれに密着する商業くらいです。

農業では、例えば米の生産高を30倍にするなんて事は出来ないわけです。

それが工業ならどんどん拡大のわけですね、やろうと思えば。

で、そういう商工業ベースで物を考えてきたんですね。

そういうベースで考えると右肩の方が便利だから廃止し止むを得ない事になるんです。

それではいけないと思うんです。工業ばかりが産業ではない。農、林、漁業なども認めていかなくてはいけない。

それぞれの物にそれぞれの価値を認める。単一ベースで物を見るんじゃなく、いわば複眼で物を見る「複眼思考」が必要なのではないだろうか。

農業と商業を今迄は、工業と同じ様な発想でやってきたわけです。どんどん機械を入れる、合理化する、だから様々な弊害が起きてくる。

林業もそうですね。乱伐しちゃって、無くなったら外国から買えばいい、なんて安易に考えていた。

やっと伝統的にやってきたそれぞれの文化など捨てて、工業的発展の考え方を、特に戦後の高度成長期にやってきたわけですね。

僕は長崎で20年住んで、札幌で19年暮して、5年前に長崎へ戻ったわけです。で、今道端さん師匠という所に住んでいるんです。

17軒しかなくて、10軒は専業農家、7軒はサラリーマンなんですが、そこに5年間住んでみて、僕は何か違うものが見えてきた。恐らく農業の経験から生まれたものと思うんですが、札幌に居た頃とまるで違うんです。

部落会に入ると常会という会議が時々あるわけです。

それがまあ、モタモタダラダラ長いんですね。

10時からだと云うので10時に行ったら2、3人しか来てないんですね。本格的に集まるのは12時位なんです。その2時間をタモタしてるわけです。で12時になるとその家で午飯を出すわけです、飯を食いながらまるで議事とは関係

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]なんです。

朝は[illegible]から集まって[illegible]として、午後4時過ぎ、[illegible]。[illegible]の[illegible]ですから、[illegible]。

[illegible]は[illegible]が[illegible]。[illegible]。

[illegible]人[illegible]。[illegible]。

[illegible]。[illegible]。

[illegible]。[illegible]。

第4回小樽運河研究講座記録

テーマ　地域自主の街づくり―市民の街づくりをとおして

時　昭和54年1月6日(土)午後1時～4時　所　小樽市労働会館

講師　倉田　力夫

講師紹介が終って、

――座談会

明けましておめでとうございます。皆様ようこそ。

小樽運河の保存問題の前から聞いていたんですが、小樽へ初めてやりましたのが今年の秋でして、この会をみつけてみて、驚いっていうんだっていいますか、驚いたっていうか、そんな物に触れる感じがしました。

これまで地域の人たちが育んだ背景がこの運動にもんで感じたわけです。

昭和49年、[illegible]同じ年ですが、[illegible]沖縄が復帰しましたが、その前後から沖縄の[illegible]都市計画、[illegible]領域や公共施設の[illegible]に関[illegible]ました。

私一人でやったのではなくて、農業、[illegible]などの専門家、[illegible]の熱心なお仲人、[illegible]しますが、住民の中の街づくり委員会、村づくり委員会の人達と一緒にやってきたことなので、私の仕事の様に説明するのは僭越なんですが、小樽の街づくりに参考にでもなればと思われます、とお話しします。

伊豆大島に元町という中心になる町があるんですが、[illegible]、丁度昭和[illegible]大火で全滅しまして、復興に苦しでいました。

その時、[illegible]の建築とか都市問題研究グループを作って、[illegible]街づくりを大島のためにやろうじゃないか、という話もありまして、あれ[illegible]、その[illegible]。

その時の計画は、かつてにあるものを例をつくるのではなく、「新のトンキン」なので大島にもどりあって、島の[illegible]、もう一つを加えることで生きがいを、ならいう都市計画があるのでは、という提案だったんですね。

その計画をたてるのにどうやったかといいますと、住民の方々に呼びかけると共に、一方で、その街の中を一生懸命に歩きまして、良い所、今まで忘れていた所を発見し

て、それを私の計画へ出す、そういう発見的発想法をとったわけです。

地図の上で線を引いて、バッサリ切ってしまうんではなく、発見的発想といいますかそういう海洋計画を目指したわけです。

その計画のあらは実現しなかったのですが、一部は実現したわけです。

大島は小笠原と同じ様に現在の海洋国家として、そこに移行出来る筈、大島の個性である筈の個性にもっと組み合わせて、という部分が貧弱したんです。

ところが今からは4年前ですから、[illegible]の場合の場合、[illegible]ですが、今でこそ[illegible]ですが、

本国時代だといって沢山パスポートが[illegible]、そこを[illegible]、[illegible]という[illegible]になって、可哀そうが[illegible]ことになり、せっかくの[illegible]が[illegible]になってしまった。

この時は、[illegible]と思ったんですね。

[illegible]を[illegible]的に取り上げるだけでは[illegible]で、[illegible]に[illegible]が入り込んでいなければ、そういうものの価値を海外に紹介つぶされてしまうな、ということを考えたわけです。

それで話は前へ進んで、丁度復帰の頃に、沖縄のコザ市という[illegible]的基地のある町に復帰記念に子供の国をつくる設計を依頼されて、沖縄へ渡ったわけです。

その時に、伊豆大島での敗北のこの轍はしたくないと考えたわけです。

行ってみますと沖縄という[illegible]で、簡単に説明しますと、明治以前は薩摩に支配され[illegible]も、独立した形態をとっていて一方では中国に[illegible]したといいます。

[illegible]以降、[illegible]ですが[illegible]に吸収[illegible]ですが[illegible]の島とは違う[illegible]、いわゆるたわけです。

第二次大戦になりますと、[illegible]は新[illegible]すぐ[illegible]されたわけですが、第二次戦争というものが[illegible]に[illegible]ていますから、あちこちやられてしまったのは沖縄だけで、[illegible]人口[illegible]を見ると、ある[illegible]の人達がごっそり抜けているという、本当に悲惨な戦争体験をして、それから27年間[illegible]、米軍の統治下におかれたわけです。

一方ではそうした歴史的経緯が、沖縄文化の独自性を保持させてきているわけです。

例えば、本州に住んでも北海道に住んでも、島に住んでいるとは普段感じないんですが、沖縄に行くと、例えば東アジア大陸の東側に点々と島なる小島に住んでいるんだな、そういう悠久の時間の流れの中に彼らも連続して生きている[illegible]。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

資の使われ方にしたがって結果がかわし、よりそれを現代化していくという、沖縄予算構造という物を作っていったのです。

そうした動きをきっかけに、街づくり、村づくりの仕方を組まれる様になりまして、その中で本土が提案したのは、今まった私の開発や「ふるさとの具体を探す」という状況の中で、あらためて考えなくてはならないのは、豊かな自然や資源の保全だと。

亜熱帯の豊富な資源であり、誇り豊かの絶景でも、本土の観光から見捨ての状態にはがっちりあった点を、共同体としての結びつき。

そういった、自然資源、文化資源、社会資源を消費してしまってはダメで、それらを保全しながら現代に役立てるようにしていかなければならない、と提案したわけです。

実験、あるこうなあったらなんですが、サンゴ礁の見える場合に31地点を、仮説地として選ったら、とたんに、その開発の結果、赤土が流出してサンゴ礁の内側にたまってサンゴは生き物ですから、赤土が堆積すると、ボロボロになって死んでしまうわけです。

じゃ、しょうがないから止めてようか、という事になって、せっかく建てて見る皆のいい景色がなくなって、別荘地も売れなくなる。

そんな事もあって、街づくりは一応全国特集しても駄目な人を、せめてじわじわと自然を固めていくやり方を多数に選ってやらなければ、と主張したんです。

一時的に土木工事が集中して、一見さかいになった様に見えても、それが破壊する事になりますよ、という議論をしたわけです。

沖縄は、その他、石油ショックがあって、石油が自然過ぎやすくなったり、一時的に土木工事が集中して労賃が急騰して見かけ上ブレになったりして、一部の地域では出来の悪さが起こった事が証明されたわけです。

そうしたやり方、お調べから一応地域計画では、そしてそれが成功になると所の様子をお目にしてもらう、一つの計画に全面的に乗っかかるのではなく、多様な可能性を持って最適を求めていきたい。

そういう点を計画、環境計画をやりたい、という事を頼まれたわけです。

それで結論は、自然の保全と、歴史遺産が残っているのだからそれを守っていく、街の特徴を発見が新鮮、外部の方に強くすぐに変化の前向きなべくやっていくという三つの原則を提案しました。

それと、その時の沖縄開発で所得倍増論がしょっ中言われていたんです。

数値で見ると沖縄の所得水準は非常に低い。それを全国平均に近づけなければならな

い。それを産業でやるとすると一つのやり方は産業を新規産業しなければ。ところがそんなにたくさんない。じゃあ工業に依存しようにれば、観光に依存しなければ。

ところが破壊した工場は労働集約型ではなく、石油コンビナートとか基幹産業がないんで、ほんの数地の割には現地の人材を吸収してくれない。

だからそれをもっと大量に誘致しようとすると、観光も、ホテルを何軒も建てなくては。

そうしたお金の流出が所得を低くしたわけです。

観光は名目上は外貨獲得産業ですが、それをはじめ、外貨のもうけを出せる。所得を高めるのは、この所得をどう生産が結びつけるかが大事なことです。

現状をいろいろ調べると、果物でも野菜でも外国産のものが安くなったわけです。

観光が伸びて、そういったものを輸入すると農業よりも儲かるから農業を捨てたわけです。

現実には、そういうものを、生産がやっぱりとか、家族の人数が多くなったとか、農業のいえば、肥料を一切やっていないとかのほうが大事なのは、それは数値として出てこないわけです。

で、どうも全国平均に比べてどうこうという議論の仕方はおかしい、もっと違う議論の仕方があるそう考えたわけです。

例えば観光でも、ホテルは砂糖黒字が、パイナップルの生産増産量をあげれば、それは豊富産の収穫ですが、逆に通常の収穫ともいえる。

たとえばサトウキビを、ハウスなんか使わずに本土より早く収穫できる。

沖縄の亜熱帯の強さは、農業にも観光、水産業にも生かせるわけです。

今ある条件を有効なものにしていけばわけです。

どういう地域産業なら結びつき、観光と今度と違う部のものは出来ないか。

そういう点に、それぞれの可能性を前の上げていくかを考えていったわけです。

最終的に計画は、対の長所が、そういうものをプラスに、より良い地域が出来ないものかと。

沖縄の亜熱帯の強さというのは、例えば一応ハウスが沖縄では強いんです。

それは関係ないわけではなくて、農業にはなるべくハウスを使わない方がいい。また、人、高り地代の安いかを考えは強いわけです。

そういう点が出てくる。海岸線は一応保全しなければ、海岸は強いわけです。

米国流を生かしつつ、計画を進めていくにはどうしたらいいか、その点が苦労した所でもあるんです。

計画の内容を詳かく述べた

くと、村ごとの実例でとおるが、乳牛にはどうやるのかとか色んな問題があって、それは、お役人と学者専門家だけで話し合っていたって、結論ないわけです。

それで、名護市、今帰仁村、石川市とそれぞれケースは違うんですが、村づくり委員会、村づくり委員会が結成されていったわけです。

今帰仁村の場合は、中央公民館を建てるのがきっかけで村づくり委員会が出来たんですが、どんな公民館なら本当に気軽に、憩いにお茶飲みに行く気分がいけるか、ということを、ある意味では子供の遊びみたいに、この絵とかいろいろ描いて、みんなで作って活動したわけです。

アイデアを出して貰ったら、大きな模型を作って皆で話のつき合いをしたらいい。

それを取り入れて大学時代仲間、仲間は公的機関の建築設計を専門職として建てるんですが、そういう形では言いっぱなしやっても、絵か作品にすぎないと言われたりするんですが、今帰仁では、村づくり委員会が結構ずいぶんやりましたから、逆っては常識を超えた絵ゆえが実現できたわけです。

一つは、沖縄は非常に貧しいので、とにかく自腹で結集しのいい空間を作れば、名護に人は集まってくるわけです。

公に開かれた部屋も必要だ

けれど、開けっぴろげの場所も半分以上作ったんです。

そこは全く自由に使えるわけです、カギがかけられませんから。

それから、役場で見ガラを黙認しまして、公民館の庶のたんたんが生徒たちの組に、村の人達、小学生、中学生にも絵を絵筆に埋めて貰ったんです。

こんな風な事で、非常に身近に感じて言える建築施設の成功例じゃないか、と思っています。

石川市の場合は、僕等は余り関係じゃなかったのですが、公園計画、改造計画、地区計画などいろんな意味でパラレスはとっているんですが、それだけに、新参者というか意見、代案とかっちゃって、非常に勝手した結果になる、この人はこうるさい何時をあおきうという性格が、初め何回か続くわけです。

そういう時、結局は何の決定にも結っていなくて、起って、ってっ来られれば意見を言うだけなんですが、ある段地をどうするかで、例の如く議論が止まらなくなった時に「とにかく見に行ってみませんか」と言葉しまして、マイクロバスを借りて、お弁当持って実際に現地へ行ったわけです。

そうすると、現地でやると非常に建設的な話が進んで行くんですね。

大体、計画というのは、紙の上に絵で書いた物ですが、もしそれを作る時に智恵を出しあう、実践していく過程で本質が変っていく、そういうことで、良い智恵を出そう、又、コンセンサスを得やすくなるわけです。

こうした委員会がやった事例には、総合計画の作成過程を通じあるのっぱりなどし、地域住民はどうやって参加していくか、例えば、青少年と親の対話とか、地域と学校の間をあなたがたは常に考えなければならない、にやれるか、地域を振興していく中とか、実に色んな事をやっています。

実践的な例ですが、村づくり委員会ではのりくんが、市民総参加の意識を盛り上げるためにアイケアコンテストを開催するというのもいいと思います。

昔はプロっぽ過ぎたんで、たんたんですが、今度はアマチュアでもいいからアイケアコンテストを開催しようというわけです。

それが余り成功しなくてもいい、作ってみんなで見てもらうことにしましょう、という感じなんです。

昔なんかはコンクリートを作って、地元新聞やテレビはかいのかと言って、そればかりで、かい分、生徒も参加しやすいです。

それから役場前にそれなりの土地を作っておけば、何かやってみるんだなという思い出将来の海岸を眺めたりするんだ

なんかで、何か、ふれる機会があったらいいんじゃないか、という例は沢山あります。

その30年前にもどうやらかというので、それで作れる絵筆「21世紀の会」という会員と共同して、地元の建築家が協議会のお手伝いをやっているんです。

どういう事をやるかというと、小学生がかんたんな絵を描いたり、エッ絵とかの公園に行ったんです、それで母に分かってもらうこと、それが楽しいね。

自然パネルをやっている所ですが、すでに住民の皆さんがたくさんいらっしゃるんです。

こうした自然の観察の基礎の作業、自然とのルギーの重さというものは、若い人に伝えたい所だと思います。

実践にいろいろ、時間がいらないという、なかなか村は沖縄の人に言うのは「あの人、北海道からなぜ来て、一緒にやってもらうんだ、ここらんでいる」

沖縄の人には「あの人はんが外国でさえ来ているんだ」と言われたんですが。

話がそれましたが、そうやって自分のまちを作った結果というのは、それから先も継続を続っていけるんですか。

この点は難が違えたりなどが、この野球場の前の広場はその野球クラブが協力してくれたが、そういうふうに公共

考えてはいかがと、将来が楽しみです。

それは行政の手腕という面だけではなくって、多くの市民の参加になるわけです。

東京で郊外からの下町なんかへ行きますと、銭湯さんが特に目立められていて、煙突が長くてあって、もれいに用意されていて、いい湯いい湯があるんですが、そういう銭湯が何故なくなっていくのかなと考えるんです。

一つには、個室化が進むことで車とか冷蔵庫が個人化してきて、冷いものすぐに冷やされる、冷えても温かいものがないとなるとやらなくなる。当たりまえです。

そうした下町は銭湯を新築も入らないとかいうのになって、昔へ戻せばいいというものではないわけですけれど。

温泉の利用なんかは自分一人のお金でやっているのがおもしろいんですね。自分が生活っていくのにきれいにしますからというものを通り下っているっていうのです。

でも、それを公人のお金でやるのでは違がないんで、住民の知れた連帯の人との結びつきでやっているわけですね。

現代の都市計画は、私の空間と公の空間とを区切りにくくスパッと分けて来たと思うんですね。私と公の間にそういった共有というか、共同資産になる空間がなければ上手くいかない、個人が個を分ける接点が間の中になければいけない、ということを今迄の都市計画は忘れてもたと思うんですね。

人間、群中の中の孤独の問題、森の問題、そういうものをきかた景観という問題は、非常に積極的なものなんです。

都市にしても農村にはそこに住むという機能ですが、何かも農業、家にとってのどこにどうかそこに建築がないという生活で生きる場所、そこを通し読める機能など沢山見なければいけです。

もっと大きな自然を考えて、山の中の森林がどういう意味を持つかというと、いっぱいあるわけですよね。

今度の新幹線というのは、よってみれば、それの交通価値が出てくるね、福岡西通なんかはそういう事しか考えないわけですよね。

だけど、炭酸ガスから酸素を作っている。それからあが新鮮したい悪な結果を果しているし、水を浄化している。

また、水に緑があることでトウ高速に膨大な土が流れてくる、それをそこを通えて流れていく動が地中の微生物と関係して海岸線にまで影響してくるわけです。

環境というのは、そういう社会的なもののアヤなんですね。それを今迄は単一的な側面でスパッと切ってきた。

環境という舞台があってその中で様々は文化伝承をしてきたわけです。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

が必要なのじゃないでしょうか。

後半はとりとめない話になりましたが、私は横浜の住民で、横浜の垣割りがなくなっていくのが残念で仕方がないんです。街を映す水辺の価値というのは意外に大事なものがあると思うんです。

小樽へもて見て、若い人から老先短まで、市民レベルで行なわれているのは、現在意味では小樽の環境が生んだそのときえるでしょう。熱で逆に見ることがあればおも低いしたいと思います。

――司会

何かご質問がありましたら。

――北村より藤本氏

小樽の場合、市民と行政がかみしているんですが、沖縄の場合は市民と行政がタイアップしてやっている。そこの辺の仕組はどうなっているのでしょうか。

――金城より緑峰氏

簡単して。

――司会

はい、どうぞ。

――緑峰氏

糸村さんのグループは、住民参加の意識を当初から持っておられたんでしょうか。

――司会

簡単して何か。はい。

――北村氏

小樽にも市からも頼まれた調査の予算金などもあって、住民参加の形はとっているんですが、それと住民主体とは違うと思うんです。ただ、人口の多い町では、本当の住民参加は難かしいんではないでしょうか。

――金城氏

まず、誰々が住民参加の思想を何想だったかですが、民主主義とはこういうものだという意識が個人的にはあったわけです。

もう一つは、今の沖縄でいえば、ちょうど戦後のどんというのがあられたもので、政治学や都市計画を中心となるために民政とか服装もず、民衆の生活に密着しなければという方法的な考えもあったんで、都市計画をしたり、日本復帰してくるなく歩いてこられた結果です。

結局のあるべきを世界を考えないにやってこられたんですが、現在に、私の住宅のそばでも代表したが、そこなものを共ったと聞いてうまれたのです。

それをやれるのは、あれは、経済というものを一応地方選えて街づくりという、民間をつの重ねる考えが必要なのではないかと、私や仲間達にあったわけです。

これはやはり主観としてあったんですか。

一応、沖縄の歴史として、復帰がうまで、ごく短期間に在んな問題を解決しなければならなかったんです。

日本が敗戦30年やってきた事を[illegible]わけですから。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

だから人口が多くてもやっぱり、と思います。

町田市は好ましい人口ですが、あそこでのお祭りの例もありますし、五千万東京となるとちょっと無理でしょうが、20万スケールの都市なら、大いにやれると思います。

――長崎氏

基本計画を提起されたお話をもう少し。

――金村氏

本来は本来、行政から発表されて、長々と長谷の専門家グループという立場で関わったのですが、それを通り越して住民の中へどんどん入っていっちゃったわけです。

で、市長さんなどは、基本計画の提案として、市民の意思をあらし、発表してくれたんですが、長々は対話の参加過程というものを意識的で通していくわけですね。

それを実現するには大規模に生活路か、大規模地元説明会しかない、というわけです。

そういう計画というのは、地元説明ショックで計画されて地元に渡されて待っていても何も来ない、という危険があるわけです。

統計の数字で市民参加されるかという点はあるけれど、対抗するために、こちらも統計の土俵にのって、所得と支出とそれで得ている生活物資を見ていくと、例えば雪国型の投資量とか、沖縄の地域的条件として資料が少なくてすむとか、住宅化率の人が少ないとか、意識を保存を加味すると、少なくとも東京より豊かだという要素になる。

その豊かさとは、今あるものを守るもの資産、放棄してない所や可能性のあるもの、地域町が発展的にやっていく点を、最後にはこの住民がセン、高齢では、地域活動では、教育かはという点に、見合う地域を、線の自治のもっと見て、それを一つずつ育ち、線の上げていく、そうすると一つがダメッたら全部が、という事もなく、何度でも復活しながらやっていけるわけです。

これは逆に、ジョーンズハーの人口増加の過剰降という本（原題 Small is Beautiful）を読んだら、どこも同じことが言いたいんだなんです。

市民参加というものを誤っているのでは、例えば公園計画をすると、子供、子供といったものから始まり、子供がなってもお勤めになったら地域にそれ点の参加もかてしまうというんですね。

各政党にはいろいろな考えがあるけれど、ユートピアで、ものだとかいう考えのようだけど。

エネルギーなんたらと、諸を編成するのは地球かも知れないけれど、誰ならば分かるもないし、環境ならばで更新していけたわけを、今の石油は更新なんて言葉は十分解きわけです。そういう意味では、現代の投資というのは、進んでいるのでしょうか、成功しているのかもしれない。

ジョーンズハーは、美と健康と幸福がこの人間の目的で、経済学はそれに奉仕しなければならない、と言っているんです。

それは学者の口で、学者、人間もっとよくて、何も経済学者のものではなく、地域でいいじゃないか、現代のレベルでは、人間は生き延びていけないのではないか、と言うんです。

そのあと、結論は出ないで夢を語っているので、寂しくなっちゃったのか。

基調講演に対しては、皆さんなにか。

――司会

どうも有難うございました。

第5回小樽運河保存対策協議会

テーマ　地域での試み

時　昭和56年1月10日(土)午後1時から午後5時　於　小樽市勤労会館

講師　小倉　隆氏　（前東京都知事）　佐々木毅氏（静岡
佐々木恒治氏　国鉄労働者　千葉　清氏
前日産労氏

講師紹介が終って、

――佐々木恒治氏（司会）

どういう話をしてもて今に至っているのか、そこら辺から話を始めたいのですが、長い、ほぼ1年前から出てくれた人達から、話を下さい。

――小倉氏

私のところは余り長くやらないので、小樽運河を守ろうというのは、ここ2年位前からのことなのですが、地理的にも歴史的にも私たち皆にとってのものではないかと思っている人達です。

僕のいった会社は、大学時代から北海道に来ていて、函館へ行ってやっぱり使けて貰った。

組合とは違い、やりたい事がやれるかどうかではない状況でそれは止めさせないようと思うんですが、その中でも命令が今は出ているものをやっていかなければならない、という感動がないものがずっと続いたわけです。

そこから会社として色んな事を始めていった、というのが今の状況なんです。

僕らの時代は、学問とは何か知らない世代で、経済的なものはできないけれど、アルバイトでもやるものなら出来る、スキーが好きだけで、そういう世代なんです。

で、学生運動がいろいろあっても、アルバイトをやるとアルバイトをしてもらえるという時代でもあった。

民間でも社会にも色々とやってきているんです。

それとこういうことは、ある時から、生命やいろんな人間関係もくっ付いてルックスとかコミュニケーションとかいろいろ。

函館へ行ってもう1年位たったわけですが、ウチは新文化というか、人の力でまもれる新文化だ、という感じでやっていたわけです。

そういうものを出そうというのは余り関心がなかったのかも、東京よりやはりずっと小さ

なこと、仕事がやっていけて、
それが組織、地域というものが気になり出したわけです。
何でも東京が中心に回ってる、何かおかしいしょうもないかと思うわけです。
東京、或いは札幌というお客さんと商売の仕方でいろいろ違うのは、そういう所謂が欠けているんです。
その辺が、この流行とは全くちがうのでしょうか。
――司会
中学から高校卒業後、ずっと詩を書いて、ふるさと雨雨とか、を一通り自分の身のまわりを見直そう、という姿勢が全国的に内容に表れます。
ルックという雑誌は、今まで、割と生産的な視野がなかった感じですが、小樽という問題にしてハの地域への関心というのは、大きな広がりのなかで自分を見直そうというのが、それとも生活だけを見て、地域の自分というものをやってかなくちゃいけないのか、どこを原点にしようなんでしょうか。
――小林氏
今やろうとしている部分があるんですが、それはやはりの身近は、商売の中でも、文化というか雰囲気というかそんな物があるんだけですが、その中からも外れた所でやって来たわけです。
今度は商売という都市の中心でやって見たい、そういう気持ちは持っています。
――司会

こう何度も聞かれた事でしょうが、神崎さん、3年前に小樽に来られたいきさつを。
――神崎氏
僕の個人的な想いと、海鮮丼というグループの想いと二つあるんですが、個人的には僕は大阪生まれですが、小さい頃から北の国、寒い所に一つの夢を持っていたんです。
社会の中に、北への憧れがあった時に、今年前、山形の蔵王で、ビアショップ山田と北海道海鮮丼を結成したわけです。
それが何故、小樽へ来たかというのは論理ではなく、縁とかいったほうがいいかも知れません。
今年夏にキャバレー巡業した小樽に初めて来た時に、縁を呼ぶ物、不思議にさせる物、小樽の人を含めた全体に魅ひかれ、「ここに住みたい」と思ってしまった。
で、運河の傍のレンガ造りの倉庫に出会って、海鮮屋を作り、現在に至っているわけです。
――司会
今、恵まれた様な個人的な動で恵まれた訳ですが、これから小樽に定着していこうとする中で、再度、地域社会との繋がりという面から見ることになると思うんですが。
――神崎氏
小樽は理屈に恵んでいるというリアリティは、僕らの生

活に入ってくるものです。
それは山形の蔵王でもしてきたのですが、しょせんは何ものでもない、という意識があって、時がたてば中に溶かされれば、溶けこんでいけない、という部分があります。
あるがある年齢になってから、生活の中では例らない、何かとも変化が起て来た事に気付きます。
――司会
田中さん達、中学生時代の友達等と何度か集まる事があるっしゃいますか。
――田中氏
ウェーブを出ないと言っても、やりたい人ですが、僕は中学生とは違ったものですから、友達にしても、僕が一人残るかというのがあるんです。
僕は、仕事をやってて、良かったなと思う事は、僕自身に帰ってくるものは感覚的な物に惹かれて来たんですが、札幌、小樽、ここを歩くと雰囲気がいいなと思った、というような人です。
――司会
ファッションかという事がありましたんですが、お仕事の上でのこだわりとしてなど、ファッションとしては無視しえない部分があるという事でしょうか。
――田中氏
よ、閉じた世界が相手、というのはありますね。
――司会
中島さん、自分の活動領域の中で、中先の質というものを感じざるを得ない、という

[illegible]

[illegible]

——中島氏

[illegible]

[illegible]

——司会

その人たちの関係も、東京でのほうが育てやすいとも考えるのでは。

——中島氏

[illegible]

——司会

お帰りの前日も、内緒からミュージシャンを呼んだり地元のバンドのプロモートをしたりしているようですが今週、地元だけでもいろいろ分かったんですか。

——前田氏

[illegible]

——司会

[illegible]

——前田氏

[illegible]

——司会

[illegible]

——前田氏

[illegible]

——司会

[illegible]

——前田氏

[illegible]

——司会

[illegible]

——前田氏

[illegible]

——司会

[illegible]

——前田氏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

——中島氏

[illegible]

——司会

[illegible]

——前田氏

[illegible]

——司会

[illegible]

——前田氏

[illegible]

——司会

[illegible]

——前田氏

[illegible]

——司会

[illegible]

——前田氏

[illegible]

小説から生まれてくるものを小説家の人たち、そういうものはありえない。

――司会

少年の皆さんは、中学生を経験してから社会人になって、その過程には、中学や高校という関所も、あるいは学校生活はあるにせよ、ないにせよあるでしょう。

その中で生き社会人として、中学校のことは知らない、知識はないという人も、結構多いのでは。

――内海氏

小説が首都、自然が天皇といいますか。

やっぱり一極集中っぱりが大事だと思うんです。

ただ、中央は、先輩、同級生さんが色々れる分りに情報が多いし、多い。

それを活性化するのは君達だというわけ。

――司会

小説さん、今の話を何か。

――小説家

ちょっと話は変るんだけれど、ボクの実感的なものが感覚的に、という話、色々がいいのが良くなかなかいんだけれど、江戸弁っていうのは、それ以外にいろいろ、江戸っていうのは、江戸時代の頃の言葉は残っていないわけです。

それじゃあ、仮名がいい、ダメ、それいや方言は方言にとどまりますよ。

でもそれは、小説から見ると、とか、文化的な表現手段の中なのとか、その工夫それぞれに為るわけで、その中で西鶴が一番だとは思ってない。

それで西鶴の中のいい物を守る、という気もないんですよね、残す気もないけれど。

じゃあ何自身、何故、全部に残ったものかと考えるのですが、「生活」をだけ残そうとしている人間臭いじゃないかと思うんですよね。

情がやるンとしていないくせの中では、もっと人間の所作が浮かび上がっていくような、ストーリーで、風土というのは二次的な物じゃないでしょうか。

――佐々木氏

たしかに、西鶴を読むのかなぞれば、そこのコミュニティの内部に入っていくわけですから、人間関係が大事なものになってくるのは当然なんですが、自分の場合は小説に表現できて、小説でしか出来ない事をやりたいと思っているんです。

地域を意識して人間関係だけだと、制限されてしまうと思うんです。

小説の永のいっぱいも、主人公の性格、そうした物を大切にして、描けるものがいっぱいあるのに、地域の中だけでは、作家のモチベーションにするのも不可能じゃないと思うんですが。

大ぶらに捕えるかもしれないけれど、人は生世界に浸っているんだ！

語ったんじゃったけど。

――司会

小説家の方、という形でアピールされる方と、もう少し一般的に、情報誌を媒介としたものがアピールも良い方法と思うんですが。

かいつまんで、もう少し簡単に、説明していただいてもよろしいでしょうか、如何ですか。

――佐々木氏

こうして、ぜひ例、というのを出すっていって、それはいろいろなものになると思うんですよ。

自分で外国の人から聞くと、いい住むというか、住みたい、住みたくないのが人間の分けです。

人ってそれいろいろ色物トゥルいんですよ。ところが、自分で自分の人生を、何かが情いっぱいとか、ウンっていう時の、それ、それ、それ、それ、それ。

やっぱり、やっぱりそれは、ハッ、ハッ、ハッ

[illegible]

[illegible]

ね。

どうも話がまとまりませんが、そうしたものを考えるには出発点、地方は駄目なんだというのに聞いたんです。[illegible]力になっていると、[illegible]ものがなかなかトップにないかと思うんです。

――全国から九州へ

地域[illegible]を[illegible]ていく[illegible]ないけど、[illegible]例、[illegible]欲しい、[illegible]気がするんです。

[illegible]の[illegible]のように、[illegible]に[illegible]は、地方からの[illegible]が[illegible]の[illegible]にくいっていう。

[illegible]中央で[illegible]作品が、作品だけ[illegible]、[illegible]人が中央[illegible]んです。

[illegible]

[illegible]

地域は非人間的なというのは極論としてはたしかにそうですが、ある個人にはそうとは限らないし、全中を東京と考えているのではなく、全中という地域として話したのですが、でもそれが東京の文化を構成する一つの要素にもなっている、それは無視できない。東京へ行くことの意味は深い。東京へ行くことの意味をあのわけです。

僕自身、地方で何かが出来ると思ってやっているのだから、東京に代表されるものがいいとは思わないんです。

でもその時に地方はいいんだという考え方にしたくないと思っている訳で、地方に金、く[illegible]、可能性[illegible]ないんだ[illegible]ないので、そこを誤解されたくないように。

――中央人

[illegible]は少[illegible]アレ[illegible]ですが、僕も地方[illegible]もったいないはおかしいと思うんです。

[illegible]の前提にあるのは個人、[illegible]一人の人間だから、[illegible]にくくし、何の前[illegible]ないのかと思うんです。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

る所があるんだ」皆、というのはお二人共芸術家なんですね。で、芸術家っていうのは人間である前に個であったりするんですよね。

僕は、社会という事を考える方だから、経済、政治、社会という面から問題点を明確にして、それを捉えてから個として対応すべきと思うんですよ。

——中島氏

それは別のんだけれど、今鈴木さんがいった様な自分の歴史とか、思い入れみたいなものを、こちらが試写室に出てこないのかと思うわけです。

それを見届けようとする所、私たちは結局とかどうしようかなと思ったと。

——小嶋氏

は、なかなか言った所は、海のプラスの性格、陸地からの性格というのは、第四さんの言葉にあり、他人様なことで、そこにはその性格があるんでしょうが、それはそれとして、政治やそれが、社会にプラスになるというのへ向かっていくんです。

僕にとって出てきたものがそうであるものの感じで、何かが欠如していると言い切れるべきものがあるわけで、そこの辺を押って欲しい。

——会場から北村氏

中島さんに。東京からやってきたCFの仕事で、これは自分の思っていた通りではないというお話がありましたが、その所をもう少し詳しく。

それと小嶋さんには、ミニコミをやってあられて、そこには反マスコミという考え方があるのでしょうが、規模の差があるだけで、やっている内容は、マスもミニも一緒ではないかと思いますが。

——中島氏

僕の映画に対する思いこみの問題になるわけですが、CFにはそれなりのルールがあるわけです。

ピントクには、何分に上回はンファックションをという風に、それは自分が要求する表現を制約するものがあわけですね。

自主制作なら、少なくとも外部からの規制はなくやれるわけです。

自分の表現を追求する。それは非常かまいませんが、具体にその点からね。

——小嶋氏

こっちの山口さんの話にあった地方がないというのはおかしいと思うんですね。

東京にも手作りの文化を志向している人達もいるわけで、中央はダメ、地方はヨシとはならないと思うんです。

そうした中でマスメディアは、中央にある事が問題なのではなくて、一部の人間が利益追求の為にやっている事、そして、大衆の一人一人を見るのではなく、総体としての大衆を見てるんですね。

僕のミニのメディアは、僕から一人一人へのメッセージなんです。だからそこを通じ

[illegible]の問題をもっと、繋がっていきたいです。

「心からこのメッセージを」「心底から」にしたいと、今考えていますが

——会場から[illegible]氏

[illegible]さんにお願いしたいんですが、あなたが[illegible]なんで、受けを出してくれますか、

つまり、中央からでもいいから[illegible]の[illegible]は意味はありますか。

——[illegible]氏

一つ例を出しますと、[illegible]年のコンサートの[illegible]、[illegible]のツーアフィルハーモニーのチラシを配ったんですが、[illegible]続けて[illegible]ん、

お呼びがかかったりもする。

[illegible]年で[illegible]の人気を作ったのかっ、それが[illegible]勝つには、[illegible]を[illegible]思いを[illegible]、というのを、チラシを[illegible]でも[illegible]続けるしかないと思っています。

——司会

そのような[illegible]で、中央中心の感を気もしますが、一応、今日はこれで終ります。

以上

[illegible]

住んでいた[illegible]

[illegible]

小説は小説でしかない[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]というのは個人としても考えられないし、ことばそのものが、というて、今の見解の様に、もっと人間の深みのないペラペラの一色のものになってしまう。

第二の自然ともいうべき小説の通病、その通病をも小説が吸収、同時に含んだ作家や読者によって育てられている。

人の子にとって造られたものだけが、誰もあなたを造ってくださった方を知らない文学自然なものになっている。

これが、風流の使命というものだろう、そう信じています。

文学風土というのは、作品に描かれた世界と、現実の風土が、重み合うことで、彼らの中にいわば心理的に根付いている。

例えば、見慣れたり聞き慣れた人名を聞いて深めていくと、風土記いう名前の風土が強く浮かびてくるような感じが生じているのが、何とも言えないいとおしさです。

僕は若い頃、一寸観てよ、広やかな山川の名前が続いたばかりのどんどん時に出てくる人名。

名前が付いて、人が沢山居、いて、海に出て行くなんていなかった。

その頃の海というものを、かつての風流を重ね合わせて見たりすれば、温泉や名産をたずねて歩んだ日々を思うことにはならないんだ。と思ったわけです。

そういう意味での文学風土が、かつての作家達がその中で生き、悩み、[illegible]び、楽しんだものが、小説に内在化にある。

その文学風土を認識することを通じて、遠は、見えてくる世界の中の小説だけでなく、小説の使命のものの表現を再発見していくことにもなる。

そういうもっと広がりを持つ物として、文学作品と小説との深い関係を考えたい、と思っているわけです。

[illegible]おったと思いますが、伊藤整が、[illegible]に小説を書いたが、小説やはりもっと[illegible]の位置付けをしようとしていたんです。

それを僕は[illegible]いえ[illegible]ていたんです。

[illegible]は、[illegible]と[illegible]と[illegible]、自分なりに[illegible]と見ては、[illegible]が[illegible]ていれば[illegible]と思ったと思い[illegible]のでしょう。[illegible]もった。その時、[illegible]が時に迫って物の[illegible]が[illegible]になった。[illegible]の[illegible]は[illegible]、[illegible]のあるべきこと[illegible]同時にセマントとして、それぞれの[illegible]は[illegible]S、この小説の[illegible]いた。そうした時[illegible]が[illegible]組織[illegible]って[illegible]て、物が[illegible]ない[illegible]気持ちになった。

という風なことを言っています。

その時、伊藤整にとって小説という術が、今日の[illegible]にある通り文学風土として、彼自身も小説を文学風土として彼その心の中にもたらした人ですけれど、その伊藤整自身が自分の作品を含めて、小説が文学風土として絶対的なものになっていたんだと思います。

そのことが[illegible]の[illegible]を[illegible]ちょっと[illegible]ていくか、という[illegible]を考えます。

[illegible]、[illegible]、[illegible]の[illegible]として、小説[illegible]の[illegible]、[illegible]いたい[illegible]。

小説[illegible]、[illegible]、[illegible]、

[illegible]いい。

長いから、というのはいろいろの問題でしょうが、水くらいきれいにすればいい、という見方はするが、然し僕にとってはどうでもいいことです。

目から入ってくる印象が意識の中でどう変化するか、それが作品にどのように影響するか、問題なんです。

よく、絵にかく、かきたいと言いますが、何をどうかくのか。

どんな程度人でも、[illegible]の座はきっぱりと[illegible]っている。それはもちろん小さい頃に見た風景で、それが意識の中に隠れて残っている。

それが成長し、僕の前に現われると、風景画の座に座れない、たるものが出てくる。

それが、意識になって表出していくというものがあります。

[illegible]、そのまま絵が風景を目にした心に触れ何行き、まだ情緒を[illegible]というものがあるのだと思います。

もう一つの話をしてみ、[illegible]合わせたいんです。

[illegible]というのは500[illegible]の小さな沢なんです。

生まれて10年いて、岩小学へいって、札幌、そして[illegible]に9年いて、また、札幌へおいでいるんです。

[illegible]てから20年経って[illegible]へ帰ってみたら非常に変わっている。

かつてあった森林地帯を[illegible]されて、枝木さえなく、ずーっ原になっている。

[illegible]はずっと山奥まで舗装されている。

3里位の道に、昔は家が70[illegible]あったのが、今は10軒もないのに、ずっと舗装してある。

僕の親も10年前に離農して札幌へ引き上げて来て、現在は友人が僅かに残っているだけです。

そういう所へ僕は訪ねていくんですが、僕の家を一時年寄夫婦で管理されていたそうです。

小さな、大きな木があったのに伐り過ぎて、はげ山に近くなっている。

木があっても、僕の背丈位しかない。

風景画も絵も差なくなってしまっている。

それでも故郷と呼べるかどうか解らないんですが、僕はいってみる、いってみて、ショックを受けて、その絵はいかなくなってしまう。

親兄弟や友人が居なくなってもの寂しくわびしい。だけど、僕が今の僕自分の情緒を育んだであろう風景が失くなっているという事、それが決定的だった。

小学校へ通うのに裸足で通っていた。下駄はあるんですが、鼻緒が切れるので、義父が木綿で鼻緒をすげてくれた。

半年以上も持つので、義父は[illegible]していたけど、それははかないから、はくと赤ムケになって痛いから、腰に結え

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ような感覚を持っているかもしれません。その問題に対する感覚は、差人に対する問題と全く同じだと思っているわけです。

それから、小樽から出ていった人、或いは他所から来た人の目に運河がどう映るか、そういう事を想像する力を持たずに、運河を語る人で良いだけと思います。

そこから出発して貰わなければ。

物理的な建築物だとか、空間だとか、そういう事はもっともっと後の問題です。

小樽の時代がどうの、そんな問題じゃないんです。

もっと人間の感覚というものをしっかり見直して貰いたい。

札幌、函館、東京が資本主義の中心になってしまったものを小樽はまだ持っている、それを認識しなければ、変なことになってしまった時に、自分の意識の中でも変なことになってしまうものが、必ず、何か地震で出てくるだろう。

僕は情緒として思うわけです。

とまれ、僕が小樽運河に強かれるもう一つの理由は、運河、という文字、そしてそれを言葉にした時の響き、それが好きだからです。

運河埋戻の向こう側には、この「運河」という文字、言葉を日常的に、見、聞きする人はいないだろうと思うんです。

この言葉のいびつさ、ちぐはぐさが、全体の原因となっている最大の理由だろうと思います。

簡単ですけれど、

――小笠原氏

続いて安藤さんにお話し願うんですが、安藤さんは、お生まれは小樽ではありませんが、ようすくお住まいで、文学作品に描いてある小樽と現実の姿の違いを感じられた小樽をお話ししてもらう。それぞれの関わり合いといったものをお話し願えれば。

――安藤氏

私は生粋の札幌の町から移ってきました。

私なりに、なかなかよく歩いて来た自分の足をもう合わせて、運河をまた今の中での様に位置づけていくか、という事をお話しできたらと思います。

私の故郷は海がなくて、大変な山がありました。

ちょっと嬉しい事ですけれど大変自由なる。

その自由さを小樽運河で見の時、政治的意味、自一、と言い方と広くとった大学時、ってる頃に考えたのは、丘に囲まれたように広がる、広い空間で、

でも、いま、本当だと思う、身がどこで変化へ移りますと、伝のつながり、運河でもなかなか人情をもが、同時に学問や知恵となってその中で対話を重ねていくまでになっている事を感じて帰って参ります。

私は自分のふるい頃の事を知っている人達に会うのは、

恥かしい人間なんです。

小樽で生まれ育った人達と触れ合う機会がございました。

詩人のグループの方達と近づきになった時、小樽の人の気質とか、捉まえ所のなかった小樽の人達が何となく解りかけてきた頃ですが、小樽のやだけで生きてきた様な人間達が、名前を略して呼び合うんですね。

そしてそれだけで触れ合いが出来て、それを見ていて、良ましいというか、何となく不思議な人達だナッと思っていました。

そういう、故郷を愛する、ドップリ小樽を愛する人達の気持ちが、越崎さんがいらした時に、運河を守ろうということで盛り上ったんだと思います。

でもこの街には根っからの小樽人もいらっしゃるけれど、そうじゃない人もいるんです。

第1回の講座の時に、私の大変嬉しい経験をさせたえがいらっしゃいました。

「何年住んだら小樽の人と認めて貰えるんですか！」と仰言ったんです。

私は良く分ったんです、感覚として。

その時に、講師の森ゆさんが「小樽に誇りを持てる様になれば」とお答えになったと思いますが、誇りをすっと持てる人もいれば、なかなか持てない人もいると思うんです。

そういうゴチャゴチャした雰囲気が小樽だと思うんですね。

正直いって文学作品を余り読んでいませんし、文学散歩する数年前に小笠原先生にご案内頂いた時くらいのもので文学作品を通して、とか、それと現実を対比させて、といった事は申し上げ難いんです。

ただ、実際に主婦として暮して、この問題、運河については良く考えるんです。

私の仲の良い友達に、市役会の役員をなさってるおがいまして、今度にその方達には何を言葉を投げかけてるのかも知れません。

というのは、ドップリ南部弁で運河を守ろうという人よりも、私みたいな、たおらっていて、誇めている、けどやっぱり運河が大事だという人の方が多いと思うんです。

そういう人達を維持するのがこれからの課題でしょう。

また、話せば判る方の人達ばかりでは、何と語り合えるんじゃないか、というも思ってるんです。

今度、物を書いて来てますと、人間というものはそんなに型にはまるものではなく、いつも心のゆれ動く生き物だと、私自身思うので、そういう複雑な人間共が、ゴチャゴチャと暮している事を、一所懸命走ってらっしゃる方が理解して輪を広げていった方がいいんじゃないか、そんな風

に考えています。

——小笠原氏

今日は小樽山君と私、行事が重なっていまして、9時16分の汽車でトンズラしたいと思ってますので、時間通り9時迄で終らせて、、、

何だか実行委員みたいな話をしてますが、（笑）

お茶をもう一杯飲みましょうということですので。

お話が続けられて、、、

——小笠原氏

小樽山さん、末武さん、私と、今日の話は別に予約する必要はないのでしょうが、小樽山さんの話を聞いていて、ああそうかなと思ったのは、ここにいらっしゃる皆さんは殆く小樽に住んだ方が多いのでしょうから、ここが故郷だというのは当然の事として、故郷を完全に捨った感覚を持つ小樽山という作家の眼を通して見ると、小樽はやはりかけがえのない街であると。

運河を埋して道路にするというシリアスな問題に関していっても、高速道路を通す事が文明であり進歩であるならば、それは傲慢であろうという、かなり刺激的な発言もありました。

一体、何を運河から離脱されるか、それは想像力であり創造力につながる物とも云えるのだと思いました。

末武さんのお話しでは、故郷から離れている自由という事と、文生活者の立場から、ドップリ陶酔型ではなく、私は大変好い言葉だと思って聞きましたが、ためらい傷、躊躇傷、という言葉がありました。成程なァと。

私はどうも、あいまいで、大体、私の持ってるイメージでは学校の故郷というのはイカサマなものでして、こと小樽の運河問題では外野席の応援団みたいなもので、ただ大声を上げてるだけですが、こうした運動では外野で声を上げるのも、ささやかながら一つの側面だと思っています。

前の話を多少補足しますと多喜二にとっての小樽は、底辺で蠢めく人々の営みの中で、他人の踏みつけられた痛みを理解する強い風土といえると思うんです。いわば社会的な基盤としての小樽です。

伊藤整の場合は、自分一人の痛みを小樽を離れる事しか良くなればなる程、どす黒くかたまって来て、人間が生きる真実の姿を追い求める時に小樽時代は重大な意味を持っていると思うんです。

何か、お二人で話し足りない所がありましたら。

——末武氏

故郷を捨って、その捨った物が大きいと想像力で補える、文学をやっている人はいいなあと思います。私の故郷はちっとも変らなくて、そういう痛みは感じた事がない。

第7回小樽運河研究講座記録

テーマ　環境保全—新たな水

日時　昭和54年1月28日（土）午後　所　小樽市公会堂

講師　神山徹一氏　小笠原克氏

講師紹介が終って、

——小樽氏

時間としては遅ですが、小樽が先にお話しさせて頂きます。

座って話してもいいですか。それじゃ座らせていただいて。

中世以降と近代的な生活というものが色のやり方がしてきた中で、原色、人間文化が大変見られております。

それぞれの色が鮮やかであろうと思ってます。新しい色彩は、なかなかこれがこの色がない所が多いと思います。

小樽にはいろいろ物があって、それを生んだ人々の、まとまりとか、こだわりとかがあると思います。

札幌には今、いろんなビルがありますが、美しさとか、安心とかの要素がある建物は非常に少のうございます。

小樽の場合は、そうした建物の文化に、ふるさと観と誇り、お金をさいて来た時代があったわけです。

その歴史を、過去の時代、あるいは現代の中で、ふるさとマップとスペースの中の中の中での土地利用の問題や、自然と人間との問題を解決し、小樽市民のアイデンティティとなるような考え方を通じて、ふるさとの街に出していくか。

範囲も広く、おかしい所が含まれていると思います。

この話合いの中で、こうした色々なお話しがあると思いますが、それぞれの、立場で、あるべきコーディネートしたいと思います。

この中の意見が出てきますと、それを用に出したものが、多うございます。

ゴミの問題、公害のためとかいろいろ大ですが、ある様な所に出中がたくさんあると文化の火を使います。

今現代の火を使う、九州まで、この様にしなければならない。

その他に水路を流すという必要があり、昔から、たとえば川に面して発達してきたわけです。

では、現在では水辺や川と都市がどんな関係があるのか

と思いますし、やはりそれなりの意味があると思うんです。

街の中を歩いたりとか、水が流れる、そういうオープンな空間が安らぎを与えてくれる。

人間がしょっちゅう通りくことが出来る通路としての空間という意味があります。

それから、河原という空間は、古くから京都などでは河川敷として使われたり、文化の広場的な使われ方をしてきました。

河原を使という言葉なども、もともと割りと思います。

日本の都市には広場が少なかったせいもあって、河原が非常に広く使われて来たわけです。

何故、河原があるかといいますと、日本の河川は、水量の変動が非常に多いんです。

梅雨と台風の時にまとめて雨が降る、そして勾配がきついため、降った雨が一度に流れてきます。

その水が流れる時のために河原というものがあるわけです。

ヨーロッパの川などは、河原そのものが少なく、雨が集中的に降ることはありませんし、平らな地形が多いから、流量も平均しています。

水位が余り上がりませんからベニスでもパリでも、住宅とか、散歩道からすぐ水際が迫っています。

日本の古い都市でも、金沢とか山形などの城下町では、川から一定量の水だけを都市内に引き込んで利用しています。

これを用水といいますが、川の水そのものは空気が多くて汚いから、そこで一定量だけを引き込んで水位変動しない形で、防災と生活に役立てたものです。

水には（＋）の面と（－）の面があります。

多すぎれば災い、少なくても災いです。

そこをコントロールする工夫が昔から色々となされてきたわけです。

流量変動に対処する工夫の一つが河原であったわけですが、現代になってその河原が見直されて来ています。

というのは、昔は都市内にオープンスペースがあちこちにあったわけです。お寺の境内とか、墓地とか、それが宅地造成でどんどんなくなってしまって、都市内にオープンスペースが少くなった。

残っているオープンな公共空間としての河原が非常に注目されてきました。

今は、ゴルフ場や自然景観保護区に指定されていますが、あれらを犠牲にして、もっと市民全部が入れるオープンスペースとして使おう。

野鳥、昆虫、草花などの自然をそのまま都市の中に残す拠点として使う。

河原、遊歩道として使おうなど色んな試みがあります。

で、これから暫く今日の主題にしようと思ったのですが、都市化がどんどん進行した結果に、川と都市の関係はどうなっていくか、ということです。

これを二つに分けてお話ししたいと思います。

一つは、都市が川から水をどんどん引き込むことで、川がやせてくるか。

二つは、都市内に、大量の水の通路がどんな問題があるか、ということです。

都市内は水を使います。

江戸では、初期には井戸と掘り抜き井戸に頼っていたからです。

都市として発展するにつれ、明治初期には、水道が敷設され、後後が始まります。

市街地でプンプンが流れるのでそれを方式として、ヨーロッパ型というものを明治中期から採用しました。

ヨーロッパ型というのは、家の中に入れるものは安全な水を、家の外に流すものは汚い水という二系統の水道です。

今、小樽は、ほかもそうですが、汚い川、臭い川になってしまいました。

小樽の大半の川には、非常に多くの魚がいました。山に囲まれた急勾配の地形の街ですから、近くの川も流れの速い川がいっぱいあります。

急流というのは、降った雨は一気に流してしまいますから、雨が降れば流量は多い、天気が続けば流量は少なくなるわけです。

ところが市街地化、市街化、ほとんどの川が小樽は水に関しては、[illegible]小樽は水に関しては、ただの[illegible]思います。

そこで、小樽では、[illegible]なお川にダムを作っています。

ダムで降水量の水を貯めておいて、少しずつ出しています。

そうすると、たまった水だけが下流に流れる結果になりますから、普段の流量はずっと減る。

そこへ下水はどしどし、流れてきます。

汚れた下水が入ってきた、流量のたっぷりあるうちは、薄められてなんとかいう事になるのですが、上流からのきれいな水は全部取り込まれたので下水だけは入ってくる。

非常に汚れがひどくなる。それはそれで、川の性格が変わってしまった、というのですね。きれいな水が入ってくれば、汚れを洗い流してくれる、という効果があります。

札幌の豊平川、東京の多摩川などがいい例です。多摩川ではトンネルで全部とってしまいます。まるで使えない、飲めない所に途中の団地や市から下水が入ってきますから大変汚い状態になっています。

都市化につれ、水道施設が整備され大きくすれば、都市にはキレイな川は残らないことになります。

これは経済学の言葉でトレードオフと申しますが、水道

を使わずに川に流れる水を減らすか、水道を電気などで用を足すカラクリを開発するか、ニッポンに一つぐらい、と考える人達もいます。

私共は、そこを何とか、水道も電気とも、ガス、川にも水を残してあげられないか、と色々考えているわけです。

たとえば、下水を完璧にして処理してもう一度用へ戻すのも一つの方法です。

また、近くに水流があれば、帰宅してくれる水、つまり地下の水を持ってくる、そんな方法の場合なども考えられます。

都市化の中で、都市河川の流出の、流量と水質をどうやって守るか、という事を研究しているわけです。

こっぱのラーメンは都市内に降った雨水の処理です。

都市というものは本来にはなかったもの、自分の所に降った雨に、廃棄物として早く出ていってくれ、下水を流してもらうわけです。

それでいながら上流の人達の地所に降った雨水はどんどんためて使っているわけです。

的確な流量の問題と、水質の問題とがあるのでこっぱに分けて話します。

初めに流量ですが、都市に雨が降りますと、昔で、舗装されていない、雨も余り立てこんでいない時には、雨水はけっこう地中に浸透します。

アスファルトの地面になりトタンやコンクリートの屋根の部分が増え過ぎますと、浸透ではなくなります。

そうすると、降った雨のうち、地下へ入る、本当に数時間に出てくる水量の比率がドンドン減って来ます。

これを流出係数と云いますが、田舎の場合ですと一割とか、ないぼい、割とか出てきません、残りは地下へ浸透して地下水となるわけです。

これが都市化すると八割から九割、出てきます。

ではどこに流出してきたとしてそれを調整できる地所、つまり地盤してもかまわない場所があればいいのですが、もうどんどん造成し埋立しているため、どこに水がいっぱい流れ込むかわからなくなっているわけです。

流出係数が高い、流れてくる水量が多い、処理をする中で時間遅延が出来ない。そういう中で、都市の下流部は洪水を起こし易くなっているわけです。

札幌でも、きっとおとしでしたか、下流部の民家で洪水がございましたが、その原因は札幌の都市化にもあるんです。

住宅地をまとめて、道路はアスファルト、建物はビル、空き地や池は埋め立ててスーパーの駐車場にしてしまう。

その結果、札幌に降った雨は、そっくりそのまま下流に集中して洪水になったわけです。

私は自転車に乗ってずっと見て来たようなものですが、自然の中はみんなスポンジのように下流の所の人達と共存で、溜ん池が水路となって徐々にポンプでくみあげたり、大変な仕組をしていたわけです。

実際は下流では、降った雨を溜められない川ばかりで、洪水になると、溢れ出て全部川になっちゃう、そんなひどい状態にあります。

それを異常のない所ではなくて、上流の部分と分離して都市が出来、それが整備された結果、洪水は非常に弱くなったわけです。

河流は、これを解決するために、中流部で一時的に北海道として下流に短時間に集中しないというような工夫に考えています。

アメリカでは、都市内に水をためる方向を考えてます。

水のしみ込んだ舗装の仕方とか、ビルの地下に水をためる設備はないか、ルーパーやポーリング場が駐車場等舗装する場合には、それに見合う池を必ず作らせるという研究が進んでいます。

これは、千歳川の洪水の量を減らす事、また、それを都市内の雑用水に使えないかという事、それから地下水の涵養源に使えないか、という事を意味した話です。

二つめに雨の水質の問題です。

都市内に降った雨は、下流へと流れます。

時に小樽運河の場合は、中心市街地に降った雨の全部を一手に受ける形で、運河が下流に横たわっているわけです。

雨水はそんなに多くない、だろうと御存じの方があるかもしれませんが、とうして大変汚ないものであります。

道路のホコリ、ゴミ、側溝の中の泥、ヘドロ、そうした状態はご存知の事と思いますが、そうした一切を雨が洗い流す。

洗い流してどこへ行くか、どこかで消えてしまうわけはありません、下流へ、つまり運河へ流れ込むわけです。

下水も同じ事がいえるのでして、一市民の立場からいえば、自分の家の周囲から、そうした下水や雨水は、早く去ってくれればいい。

下水管を入れようと公的な機関さんに提案するんですが、下水管で運ばれた先がどうなるのかは関心が薄いんですね。

小樽の下水も相当部分が運河へ流されています。

実は、都市内部の低い位置にある水面というのは、非常に汚れやすいものなんです。

然も、一度汚れると、どんどんみんなが捨てる傾向があるんです。

小樽運河ですが、ただ古い形の物を残すという事じゃなく、市民に愛される形で残るのでなければ意味が薄いと思うんです。

そのためには水がきれいでなければなりません。

水をきれいにするとはどういう事かといいますと、どれだけ汚染物があり、どれだけ量のある流れがあるか、その相対的な物で、水質は定まるわけです。

汚染物、つまり汚濁負荷は大きく分けると、小樽の下水からの負荷とさっきお話しした雨水が運ぶ負荷、それと若干の産業廃水があります。

単に希釈流量を増やすのは小樽港の汚染にそのまま響くわけで、運河は解決しても小樽の水の問題としては何の解決にもなりません。

負荷を減らすことを目指すわけですが、市民の下水は、1日に7万t とか6万t とか決まった量ですので微量した処理をやろうと思えば比較的やりやすい事です。

問題は雨水で、特に降り始めの、市街地を掃除して流れてくる雨水、これは量の変動が多いので大変ですが、この処理もやってやれないことではありません。

ただ、どれをやるにもお金はかかります。ですから私のように札幌に住んでいる者が言って下さい、というのは簡単ですが、小樽市民の皆さんは、選択に負担がそれなりに伴なってくるわけです。

ですから、運河をどうするかという事は、一面では皆さんの税金を何に優先的に使うか、どういう考え方を皆さんが選ぶかであって、そこにはそれなりの心構えと、それなりの負担が必要だと思うわけです。

余りまとまらない話になりましたが。

――神山氏

神山でございます。

私は、直接に小樽運河にしぼってお話ししたいと思います。

運河の中に汚ない水がたまっている現状は、ご存知のとおりでございます。

今も、汚ない水が流れこんでいますし、それから埋まったヘドロ、この両方が運河を汚なくしている原因であるという点は、決定的に間違っている通りです。

水が汚ない、というのは色をあるわけでして、水の色があるという事に対して、魚が住めなくなるという事には、水俣病の原因物質の水銀が入るなど、有害、有毒な物が入って住めなくなる場合もありますし、伝染病の病源菌が入って住めなくなる場合もありましょう。

運河はそういうのとは違いまして、下水と一緒に流れこんだ色々な有機物があり、或いは水の中に浮いている微生物の作用を受けているわけです。

もしも微生物が全く働かない、いなくなる、そうすれば、水は見たところもっと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

す。

で、一つモデルを作って考えました。(図-1)

運河というのは、ある、幅の中に窪みがたまっているみたいなものです。

実際問題、色内川などの川水や下水が常時流れ込んでいるわけでなれをQ_{in}と書きました。Qは量を表わし、入って来る量という事で、川水が主ですからQ_{river}のことにしました。

海側にはきっとの水路がありまして、潮汐の間隔で海水が出たり入ったりしています。

入って来る海水量Q_{sea}のまっけてQ_{ts}としました。

出ていく海水の量をQ_{out}としました。

長い時間でみれば、運河内の海水の量は変らないのですから、入って来た全量に出て行ってるQです。

$$Q_{in} + Q_{ts} = Q_{out}$$

となります。

で、中に溶けてる酸素の濃さが問題なわけです。それをCで表わしてあります。

入って来る川水の酸素の濃さをC_{in}、同じく入って来る海水の酸素の濃さをC_{ts}としてあります。

出ていく海水の酸素の濃さは運河内の中の濃さと殆ど同じと見ました。運河には窪みがあるのですが、中をよくかきまわしたとして考えていきましょう。

もう一つ問題になるのは、元に戻がたまっていることです。これと酸素を消費するんです。で、その量をRとします。

し、つまり酸素の補給を決める因子が幾つかあるんです。

一つは空気中の酸素が水面から溶け込んでくることです。

有ることに、かなり沢山溶け込んでくれるんです。

それから、酸素を含んだ水が入って来ます、川からと海から、さっきのC_{in}とC_{ts}ですね。

V：運河内の水量

C：運河内の酸素濃度

R：運河内の酸素の量

Q_{ts}という量で表わすことです。

それだけではなく、さっきお話しした水の中のバクテリアが酸素を消費する、これをBODという指標で表わしていますが、そのBODで表わす物質の量に比例して酸素を消費してゆきます、その係数のkをしとしてあります。

底にたまった泥に触れない状態でも、ある程度は酸素を消費すると考えられています、時には発生した、その時の速度はRと呼んでおきましょう。

最後に、太陽で光合成をする植物がいたとすると、太陽が照っている間は、水の中に酸素を補給してくれます。

こういうふうに、この6つの作用が運河の中で働くわけです。

①水面からの溶解酸素の補給。

②酸素を含む水の流入。
(河川水、下水、海水流入)

③運河内の水の流動。
(水の流動速度v)

④水中での酸素の消費。
(水中のBODの量L、kの値、水温による)

⑤底泥による酸素の消費。

⑥光合成による酸素の補給。

これを式にしますと、

となります。

ここで底泥の酸素に関係は温度で例えばいろいろもありますが、私の場合は、

この仮定が、余りに現実離れしているとはおっしゃったりが解るかもしれませんが、大海の真中で強引に言えば事にして通ってしまいます。

仮定条件

1. 内部の海水は常に完全、撹拌混合されている。
2. 水温 T ℃ 見込み
3. 水深 h m (完全混合)
4. $C = C_s$ を標準
5. P_{in} と P_{out} は Q_{in}/V と Q_{out}/V
6. M_{in} M_{out} は無視
7. S → max 971 mg/l (飽和濃度の濃度)

さて、もう話はすっかり決まったものとして、さっきの仮定の数値をこの式に入れて計算してみたんです。

その仮定というのは海水温がT℃で、pH値、身が味のある程度低くって、酸素分は水面に出て、ロをパクパクやり出す、でも安定性のバンドリアはまだ効いてくれるような数値の数値を入れて見たんです。

そうしたら酸素の量はさっき

$$\frac{dC}{dt} = K_a \frac{A}{V}(C_s - C) + \frac{1}{V}\left[\frac{Q_{in}}{\rho_{in}} C_{in} + \frac{Q_{ts}}{\rho_{ts}} C_{ts} - \frac{Q_{out}}{\rho_{out}} C_{out}\right] - \left\{K_L + (P_{in} + P_{out})\right\} + pC$$

C_s：飽和酸素濃度，A：水面の面積，Q_{in}：河川流入量，Q_{out}：河川流出量，ρ_{in}：河川流入量の密度係数，C_{in}：河川流入量，ρ_{out}：河川流出量の密度係数

は考えたが、お湯は残って今くんです。

実際に酸素の量が減ってゆくという点は、結局は嫌気性のバクテリアが住みづらくなり、というかは居り始めるということなんですね。

という訳で、単に流速をしただけで、他は下水も今のまま、汚水の住入りも今のままでいけるというのが押した訳です。

ここでは、小林先生の言のように今現水量を増す、それを海水の海水を使ってという方法を考えました。

海水をポンプを使って補給することでやるわけです。

現河の水深3mのままですと大雨などに雨水量が多いものですから、水深をもう少しけちって浅くしてやりますと、口径25cmのポンプが6台あれば済むでしょう。

簡単のようで簡単ですが、ポンプおよびポンプを作動させるに必要な電力を計算しますと、

どこまで増やせば良いのかを調べますと、1km当り電気料金を1円として、毎年1千万円以上の電気代を払わなければなりません。

設備にも費用のかかることもあるし、こんなにお金をかけるのはもったいない。

だけど、海の干潟のエネルギーを上手く使えればという可能性はあります。

次に考えたのは、とにかくもっと増殖してやればいいのだから、水質を一所懸命にかきまわしてやろう。

そうするには30kwのエアレーターが7台、運河の中でみなばしゃばしゃやっていればいいんですが、性能は性能ですがこれもあまりいただけない。

それから、これは以前に運河の調査をした時に提案したので、石塚さん達が公園化計画を立てられた時に紹介してくれましたが、入ってくる下水をきれいにする。

於古志川の下流に幅10m、長さ50m位の沈殿池をもう一、色内川の下にも同じ様にすれば、流れ込む有機物は非常に少なくなる、そうすると腐敗状態にはならなくなる、つまり、臭くことはなくなるわけです。

このやり方ですと、ざっと設備に1億5千万円はもかかります、他に運転代も別にかかるので、まだ色いたくだ、と御言われるかもしれませんが、

我々としては優先的にきれいにして頂くのが一番望ましいのですが。

そこで、今ちょっと考えているのは、運河の底のヘドロを平均にならす、そうすると水深は今の1.5m位になりますが、そうしてその上に砂の様なものの層をある厚さにしてやりますと、底質の酸素消費は殆んどなくなります。

今のお話しが本当になれば、例えば、ヘドロの中の水は汚れているから、埋戻すとしたら、何か別の方法がないということになります。

それ以外の到達点が、ってこようと思ったのですが、時間がないので切にしません。

そうして実施していこうと小樽市はきめたいかどうか分からない、そりゃあ凡いにしろ、ってもいろいろ、考えたらこの辺までというわけです。

――司会

今日のお話しは、ずいぶん盛りだくさんでしたが、どうぞ御質問ください。

これから皆さんの一般的、というお話しをしようと、皆さんをとっていらっしゃるようですが、小樽の中は、運河の中の、川がそこへ流れ込む中央部分の水質が悪いというのは事実ないんです。

特に潮の満ち干潮、それから夜と昼の時間に、海路にたまった土や泥を大量に運ぶんです。

これは、将来、小樽市の下水道が完成になれば、例えば、下水は流れないから、埋戻すとしたら、何か別の方法がないということになります。

それ以外の到達点が、ってこようと思ったのですが、時間がないので切にしません。

そうして実施していこうと小樽市はきめたいかどうか分からない、そりゃあ凡いにしろ、ってもいろいろ、考えたらこの辺までというわけです。

――司会

今日のお話しは、ずいぶん盛りだくさんでしたが、どうぞ御質問ください。

これから皆さんの一般的、というお話しをしようと、皆さんをとっていらっしゃるようですが、小樽の中は、運河の中の、川がそこへ流れ込む中央部分の水質が悪いというのは事実ないんです。

その辺でしょう。

――会場から

小樽は、運河を埋めるべきだ、という意見が非常に強いんですよね。今日のお話しで、運河

[illegible]所からの汚水は流れがよくなるって例、たとえですが。

流れるか、という場合のもう一つに、市民が浄化槽をつくることがあるんです。

[illegible]会で公共下水道の計画をもっていますが、市民も市もできる限りない、金が[illegible]いことです。

それから小樽には[illegible]もの[illegible]があって水洗用工事が市内のあちこちにあるんです。

いわゆるどりも流れはあるけれど、排水量30ℓ未満は[illegible]面倒みないんで、そのまま河川に流れ込む。

臭いというのは我々にとって大問題なわけで、市役所には公害担当のおもいるのだから、早くきちっとして貰いたいものだと思います。

――山田氏

ここ、3年、小樽の下水道も大分進捗されてきたと思うんですが、雨水だけを流した場合に、その汚なさや酸素の量というのはどうなんですか。

――神小氏

雨水その他は路面酸素量もないし、まあきれいだと言えるんですが、それが道路や住宅、側溝などを洗い流して来るのが問題なんです。

そのゴミや泥の中に酸素を消費する物質が含まれているわけです。

――小林氏

そっちのお話しで、小樽運河なんかもういいんだと思う人が増えると、[illegible]も[illegible]もいいんですね。

運河の[illegible]ですが、あんなに[illegible]、あの水[illegible]、[illegible]考える、[illegible]ですが、たとえば小樽市の水[illegible]、[illegible]の基準より上げるとしたらどの[illegible]ることを[illegible]ですか。

――山田氏

[illegible]の[illegible]の話などでは[illegible]と[illegible]したそうですが、小樽[illegible]の直接[illegible]ないとやれないのではと、[illegible]を待っているのですが。

――[illegible]氏

[illegible]会が[illegible]という事では私共の[illegible]。申し上げられるのは、小樽市民の皆さんが思っておられる以上に[illegible]という事です。

――小林氏

下水道は[illegible]の[illegible]なんですが、雨水の処理場というのは、ごくごくアストケースという[illegible]で、[illegible]市内[illegible]の[illegible]という[illegible]、お分かりになれないでしょうね。

――[illegible]氏

[illegible]は下水処理場を造っているようが、そういう下水処理をやっていけば運河はきれいになるのでしょうか。

それと、先に建設学会の先生達が、下手に埋め立てると不同沈下を起すかも知れないと御言ったんですが。

――[illegible]氏

[illegible]、[illegible]ありがとうございました。小樽市は下水道[illegible]あろう、そういうこういう事が[illegible]、[illegible]話しでお一たわけです。

地盤沉下の問題は[illegible]に解決出来ますし、そういう[illegible]は進んでいますから。

――司会

[illegible]のものは[illegible]様にはいかないでしょうが、[illegible]、問題になったのは道路ではなくその[illegible]に不同沈下が起きる可能性があるという話しがったと思いますが。

――

それは考えられますね。

――司会

今日はどうも有難うございました。

第[illegible]回小樽運河保存[illegible]記録

テーマ　小樽への提言

日　[illegible]年[illegible]月[illegible]日([illegible])午前[illegible]時～[illegible]時

講師　[illegible]氏　[illegible]氏　[illegible]氏　[illegible]

[illegible]

――[illegible]

[illegible]

[illegible]、[illegible]ルトラストは、[illegible]月から小樽の[illegible]として、[illegible]月には[illegible]、[illegible]にはJR[illegible]Aに[illegible]

[illegible]ルトラストという[illegible]の[illegible]、[illegible]

[illegible]

[illegible]

昭和30年代半ばからの10年ぐらいの間、ふと、いい気はガラッと変わったわけですが、経済的なインパクトが、小樽の場合は、特に社会的な面でも作用しているとまえます。

歴史的な街なみというのは、古い家が、物として残っていれば良いというものではなく、町の顔であり、地域のコミュニティの生活の舞台というものですから、

残る、というより、作り上げていこうという力がいるわけですが、金沢の伝統が、マーケットに相かっていると一応言えます。

観光客はさ部に集中しますが、しかし、オール部では、小樽のような観光都市は、小樽の産業の問題、経済全体の問題になります

[illegible]ですから、[illegible]ながらゴーストタウン化しているわけです。

どこの港でも港湾地域にはそういう現象がありますが、バックシーザウォーターフロントという言葉がありましてもう一度水際に戻ってこようと盛んに試みています。

その意味からも、集合住宅を建てる、複雑な人間関係をする地区を設けて、もっと人を呼んでいく必要があると思います。

これは土木用語というより、都市計画の工業地域とか商業地域とか色分けするあれですが、現在は地域が工業、港で貨物地帯である。交通機能が今あるという事で活性化を図るとともに、新たに開発している港を総合地区として生活レベルで[illegible]していく事が必要だと思います。

現在港と海岸を地区で分ける風潮があると考え、僕らはこれを「開発と保存」というコントラストのある計画[illegible]に対比しました。

それと、この運河地区の[illegible]のもう一本の柱として、「水辺」というのを設定しました。

都市軸というのは耳慣れない言葉かも知れませんが、都市の骨格というか背骨と考えて戴いていいと思います。

都市はアミーバの様にどこまでもっとも効率にはいかないもので、パリにはシャンゼリゼー、大阪には御堂筋という計画的な都市軸がありますし風格のある街には必ず、それなりの都市軸がある訳です。

小樽にも見えない形であるのですが、それをもう少し見える形にしようという事で、駅前地区から港湾地区に、大きく都市軸を計画しました。

商業地は商業、交通、賑わいの点、色彩豊かは集合住宅をなるべく人口密度を高め、運河沿いに文化施設などを、港湾地区に新しく官庁、行政機関などを建設するプランです。

この都市軸は、駅を下りたらその街を通して港の見える街に出るという意味、運河沿いの石造倉庫群を小樽の原点と捉える、そうした精神的な意味もこめたものです。

運河地区の再開発の中では、都市軸と、前の開発と保存というこつを基本に、

☆商業整備
☆景観整備
☆水環境の浄化
☆石造倉庫の修復と再利用
☆交通の提案

という事を提案していきます。

後でご質問の時にもう少し補足させて頂く事にしまして、この後は桑下氏に。

――桑下氏

私からは景観整備の考え方という事でお話ししたいと思います。

と言っても非常に実際としていきますので、まず、景観を

[illegible]

[illegible]

[illegible]ったお話です。

[illegible]、石造倉庫の移築と再[illegible]についてですが、石材が[illegible]ている場合もありますが、[illegible]被害する恐れがある。

[illegible]とすると、石材なんてあ[illegible]の人ありうか、職人は、お金[illegible]、[illegible]があるわけですが[illegible]、札幌の[illegible]は[illegible]から出[illegible]ていまして、余[illegible]、リンゴの貯蔵倉として[illegible]されています。

[illegible]ですから、材料もあるし、[illegible]もいい。

[illegible]は骨[illegible]ですが、制度と[illegible]方法で補助金を出すなど[illegible]の仕方は色々ありますの[illegible]、現実的に可能だと思い[illegible]。

[illegible]という点に金庫を使って[illegible]ったらいいか。

[illegible]を金庫として使って[illegible]れば一番望ましいのでし[illegible]、流通機能が中心部とか[illegible]部にだんだん移っていき[illegible]ますので、将来的には今の[illegible]の機能を変換して、何か[illegible]に使い方をしていかなければな[illegible]ないだろうと思います。

[illegible]の機能の中での都市論[illegible]と関係するわけです[illegible]が、文化施設として使っていくのが一つ考えられます、

例えば、郷土資料館、図書[illegible]、美術館といったものに。

その点というのは、温度[illegible]湿を調整する機能があるので、こうした文化施設にはその利点が生かせることになるのです。

それから今度は、[illegible]とかポートフェスティバルではコンクリート倉庫[illegible]ますが、[illegible]は[illegible]いので、音楽とかその他の[illegible]も考えられます。

[illegible]もありますから、[illegible]ラリーというかたちで[illegible]設置することも可能です。

こうして利用する場合、問題になるのは、防火面、[illegible]を[illegible]ようと、それ[illegible]ますが、[illegible]という事がありますが、技術的に充分対応できる。

[illegible]には倉庫という建物がありまして、外観に昔のままで[illegible]を補強しては[illegible]ガラッと変えた、そういう例が実際にある訳です。

小樽の石造倉庫の場合でもコンクリートを打ち込んで強力壁を設けるとか、[illegible]補強してやることで[illegible]と思います。

で、この間にある人に頼まれて言ったのですが、大[illegible]の改造例で、[illegible]として再利用する例です。

内部は、非常に[illegible]がよりそ[illegible]んでいますが、[illegible]があって、なかなかきれいだと思います。

では次に、美観[illegible]から交通に関してを[illegible]のお話。

――道路的

道路問題に関しては小樽でも大変ホットな、[illegible]千[illegible]問題がありますので、どういう提案をしたらいいか迷った[illegible]

[illegible]

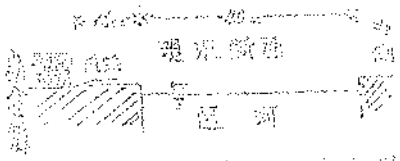
[illegible]

[illegible]

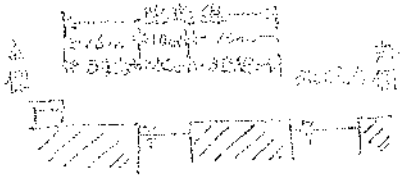
[illegible]

[illegible]

[illegible]



現況はこうなってますが堀河に流れこむ分水路の水路を幅10mに拡し、歩道の歩道をも併せて6車線の道路を作ろうというものです



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

その他のいろいろ[illegible]
ば[illegible]することは[illegible]
し、金庫[illegible]ふれる[illegible]
[illegible]ではない訳です。

金庫の文化財[illegible]への[illegible]用が行なわれていけば、何十年か先には、この地区から[illegible]を排除する[illegible]も考えられる訳です。

それが6[illegible]のもと[illegible]
[illegible]ものでは、これは大[illegible]
[illegible]で、[illegible]とそういう[illegible]はないでしょう。

[illegible]の[illegible]地区の[illegible]
[illegible]、そういう[illegible]
大[illegible]にし[illegible]、本当は[illegible]的に[illegible]
[illegible]という[illegible]
[illegible]ですが、[illegible]
[illegible]、可能性を[illegible]
[illegible]ですわない、そういう[illegible]
[illegible]て欲しい。

[illegible]の道路に関する[illegible]
[illegible]は思[illegible]、こういう[illegible]です。

――[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

を感じる、つまり、上からの指定ではなく、その地域や市町村民の意思が第一だという事です。

もしも、都市計画と法律がかぶった場合はどうなるのでしょうか。

今迄の単体での古社寺の保存などとは違って、市の都市づくりの中でどう地区をどう位置づけるのか、という問題がはっきりしてきます。

地区指定は、特に歴史的価値が高いと認められるものは、直ちに「重要」を選定する事が出来て、「重要」になってから、補助金が出ます。

小規模の場合は、「重要」までは認めないという文化庁の方向もありますし、全国的にも価値の高い地区だと思います。

仮に指定された場合、改築が出来ないとか、自分の所有物なのに規制されている感じがなくなるのでは、という心配があると思いますが、文化庁は指定の中で「この制度の目的は外観を保存することにある」と言っています。

外観を変える場合は許可が要る、まろで認めないなんということはないんです。

内部は殆んど自由という事なんですが、考えてみれば当り前なんですね。

歴史環境の良さを維持していく事が目的なのですから、生活を優先するのは当然でして、そういう意味では今迄の文化財保護法と比べて、格段に進歩したものである、と言えると思います。

街並み保存の事業費などはするかも心配な点ですが、補助金の問題は非常に高いわけです。

奈良の場合、浅茅という事になりますが、ふるさと参考にしたいと思うのが近江八幡の西川の例なんです。

[illegible]

[illegible]

それも結局は国さんですが金融機関から借りる。

この辺りを上手くやって、[illegible]

――柳田氏

[illegible]

――[illegible]氏

[illegible]

――[illegible]氏

[illegible]

――[illegible]

[illegible]

[illegible]

☆　☆　☆

第9回小林運河研究懇談会記録

テーマ　緑・環境自立の街づくり

時　昭和62年2月16日(金)夜7時～9時　所　小林市役所[illegible]

講師　大石利信氏　平田遠司氏　司会　小林英司

懇談会の模様…

――小林氏(司会)

お疲れさまでございます。

本年度(1月6日)に予定していました所、色々の事情で[illegible]の講師という為替になったとのことで、本来は[illegible]ではない日会[illegible]の方がいらしたのでしょうが、急遽ゴンドヒッターという事になりました。

ゴンゴヒッターというのはその打者よりもスラッガーで[illegible]ばいけないと思うんですが、[illegible]ですが、[illegible]はありません！、ラッキーでかがとんくらいでいけんげと思っています。

それでは[illegible]の[illegible]からお話をお願いします。

――平田氏

本日お招きを受けまして皆さんとお話しのできる事を非常に光栄に思っております。

私、この小林という街には30年程前にドゼが寄から作った本物を売りに来たことがあります。

それと私の小学校の時の先生が入寄町にお住まいで、九州大教授をなさってらっしゃいますが、現在も住んでらっしゃいます。

そんな事で、今回お招きを受けた時に非常に懐かしく思った次第でございます。

私は土曜生まれの土曜日で、お気に召す様なお話しができないかも知れませんが、今迄、北九州で、[illegible]お話ししたいと思います。

土曜日という日は[illegible]北へ30km入った所にございます。[illegible]は河内郡一戸[illegible]と申しましたが、[illegible]で北九州の河内郡[illegible]になりました。

土曜日は[illegible]ございます。その[illegible]多い[illegible]でございます。

[illegible]は、土曜というよりも、ドゼが寄あたりに[illegible]の町といわれております。

[illegible]と申しますと現在では珍しくもありませんが、ドゼが寄から作る[illegible]いわゆる[illegible]を作ります[illegible]の合理化工場を北海道

で一番最初に作ったというお話でございます。

それと今一つは、北海道からお米へ送られる馬令薯俵用の大麻袋を私の町から送っているというのが実態でございまして、各方面からじゃがいもの町と呼ばれる様になってきている訳でございます。

さてこのじゃがいもの芽が出てきたのか、というとすると、本当にその、何とおいますか、生活の知恵、安いに生きるためにはそうせざるを得なかったのだと私は思っております。また、私自身も、馬鈴薯に生きていくためにも色々のものづくりをやって来た、と思っております。

北海道は開拓以来ようやく70年余りが過ぎております。

開拓当初は、豆と粉子の多かったのであります。

おんなたちに伝承した麻袋がありますのですが、その豆も冷害で作ってさっぱり、という状況が連続でございました。

それでは何がどういうものを作ったかというと、昭和の初期ですが、うちの町に水田を政府が作らせたものでございます。

水田は出来ましたが、収穫量は安定せず、結局は実らなかった。

結局は、水田作りに借りた金の返済で全く絶望がすかった、そんな事が昭和初期には繰り返された訳でございます。

そういう状況でしたから、十勝の中でも一番貧乏なのは士幌であるとさえ言われた地域でございました訳でございます。

たまたま、昭和6年に、農協の前身である産業組合が発足しておりますけれども、その当時は貧乏人が寄り集って作った組織でしたので、どうしても色々な資金が出ない一面がございました。

それが、幸かそれとも不幸か、戦争が始まりまして、それらの経験で作られた組織が、農協は全部統制に加入させられる「産業会」に切り替えられた訳でございます。

それで町内の組織は全部が産業会に入るという命令を受けた訳でございます。

開拓すなすので、分類産業と言い作り、やはり食べる物、それから食べる物をかりして作らなければならない状況でした。

その時の指導者が、冷害に強い作物を中心に、という事で呼びかけておりました。

昭和21年には農業機械小さな澱粉工場を設置しております。

町内の農家の皆さんに、豆よりも安全な芋を作りなさい、芋を作ることで冷害から経済的に身を守ることを勧めて来て、昭和30年に澱粉の合理化工場を新設した、というのが実態でございます。

昭和30年に新築した澱粉工場は、馬令薯は1俵が60kgで

すがそれを持ち込んでいました。

そういう工場を立てたのですが、実際には、農家のお工場のために芋を作らなければならないのは嘘だ、というのが農家が芋を作ってくれないという状態が初めの3年続きました。

ところが31年32年と冷害凶作が続きまして、農家の方が入会せずを得れば始まらないと、手作りの一生懸命やって来てくれた訳です。

工場を建てた時は、馬令薯は芋が足りなかったのに、3年経ちますと芋が余ってしまって工場で消化できない、過剰況になりました訳です。

そこで農家の皆さんは一方で、何とか澱粉以外に売れる者はないかと考えて相談を始めました。

澱粉と名前がついて出てきたのが、うどんの粉、うどんの粉はいろいろ、というものがいっぱいあります。

[illegible]

結局の結論がでましたが、結局の結論がでるために作りまして一生懸命やってきたのが士幌の芋の歴史でございます。

昭和の初期の澱粉にしたものが1俵、使用にも耐えたものが100俵、今年度の間で今の倍の生産でまり返ってきております。

終戦直後の工場では、10a当りの収穫は10俵から20俵しかとれなかったものです。

それから、部内のたくさんの人たちが芋の先進地を視察に参りまして、どうやったら反当収穫を上げられるか、そうした問題をくり返し、くり返しやってきました。

現在は、平均的な反当収穫は30から40俵というようになっております。

最高収穫で一時は[illegible]俵、昭和12年に入会100俵と言われております。昭和現在でも[illegible]俵という方が12俵[illegible]、[illegible]俵の方は大体30俵[illegible]ですので、単純に農家[illegible]で割りますと、一番平均の所は700kg、倍数は600kgくらいでしょうか。

そこのところまで来た、農協が中心になって[illegible]と思います。

そうした澱粉工場の発展に[illegible]ですが、他の農協の組合長と、[illegible]に[illegible]ではなく[illegible]前の[illegible]でした。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ター、[illegible]ホーム
なと本当に、生まれてからと
くらべる位の様々な組織を作っ
た、そういうことです。

一方では地域が手作りをやり
ますし、一方では町が、医
療機関、福祉施設などを充実
させて来た訳でございます。

何しろ、どうしても土地はす
ぐ近くの山麓で利用できた
土地でございます。

[illegible]く、[illegible]主が居ります。

土地を作っても水田もが無
い、[illegible]でもどんどん出し
ていくわけにはいかない、
[illegible]水田が[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

土地柄ということで一にそったのですが、それと並行して為谷さんが進めるまでに一生懸命取り組んだのが人づくりです。

土地があっても、それを使うのは人間である、と仰言って、まず町職員の教育を今に行なう、もう一つは産業後継者の育成という事に非常に力を入れました。

私の町の基本はこのニつしかないのでございます。

それを推進していく上で、何を選択するかという、広報広聴活動のための町営テレビは家まで走ったりもするのですが、基本的には、土地と人のニつしかないのです。

それを基本に置いて、地域の自主と繁栄を内部で育て、それを外部にまで拡げていく、これが地域のやり方だと思います。

地域資源を何だと見る向きも多いのですが、確かに色んな事をやっております。

何かとう、色んな事に成功した様にも見えます。

これは当っていません。

成功したもの、失敗したものの数多くございます。

たまたまバランスが保れている訳です。

ワインも当初には、こんな売れるかどうか判らないセンブリみたい様な物を作ってかうする気だ、と議会に相当怒られまして、その年に赤字を絶体に作る訳にいかない。

そこで実は、平田先生の名へ「何もかもの発表にはワインを買って」と頼みこんだ事もあったのです。

そんな風で、何とかやってきたが、ワインブームにぶつかって、それが吹いたというのが実状でございます。

地域の中には色んな素材がある、その素材を使って何か出来ないか、と考えたひとつがぶどうであり、ワインの醸造であった訳です。

これはどうしても仕方ない時間と資金のかかるものです。

醸造食品類の研究なぞ、当時の日本ではどこでもやっていない。

今、個人にやってますが、これからまだまだかかる訳です。

大体10年間かかって、北海道の醸造食品類の研究所として日本では一流との折り紙はつけられています。

これを作ったのは丸谷さんでも私でもなく、第一線の若い研究員達が作りつゝある訳です。

大学卒で入所したての連中に、停年退職する立に居の名前のついた品種をひとつ作る、それが君の仕事だぞ、と、大体そんな風にやってます。

町有地が沢山ありますので、ひとつには、大規模な草地開発をやりまして、乳牛は勿論ですが、将来は、平田さんも仰言ってましたが肉の時代が来るだろうと考え、肉牛の肥育実験、それを更に拡大して

考えて、肉牛の肥育を中心に[illegible]しております。

牧地を今は1500haもっていますが、将来は2000haにしたいと考えています。

それからやはり町有地を活用する意味で林業にも力を入れています。

農業後継者が後年にも残るを育てる様にと、給料制度を採用というのをとっています。

こうした事業の推進の為に、[illegible]、[illegible]、[illegible]

という考えで「生きがい焼」というものをやっております。

ブランデーを老人の焼いた壺に入れ、生きがい焼ブランデーと称して売っております。

かといって年金、老人福祉等の問題は投げた訳ではなくて、逆に私の町では68さまの引き下げも終っております。

考えてみると、私の町のやり方は何点かにしぼられるのかなと思います。

一つは、6300haの町有地を使って幅広い施策をしてきた。

二つには、地域の資源を元に地域自足主義を進行し、それを外にまで拡げた事。

東京や札幌に町営レストランを持ったのもその現われでしょう。

三つには、公共的営利主義に徹して来た、例えばワインなどかなり儲けてしまいました。その利益を町民全体に配分して、つまり利益配分を主義に町民福祉を向上させて来た。

四番目に、住民の行政への直接参加を積極的に推し進めよう、例え批判されようとも住民には知らせるべきだし、今年はこういう事をやりたい、その是非論を戦わせる、一つの場を常に持っていよう。

五番目に、ちょっととげのある言葉かも知れませんが、中央なり県庁の側度に対して多少なりとも反骨精神を示していく。

中央から補助事業の話がきてもその受け入れにはなかなかやらない。本当に地域のためになるにはと考えて、作り直して町が上乗せしてなやっちゃうという反骨精神。

この五点ではないかと思います。

もう、この28年間、任命当時を考えますと、一部は形づくられたものもありますが現在にーリンクしているものもあります。

そうして一連の事業などを通して地域の活性、自立といったものを図っていく。

それは、どういう形かはさておき、一つの方向性につながるのだと思います。

ではお前の町の地域形成は何だ、というと、残念ながらどうかというと全体に遅れを、そちらへ一生懸命やっている。

非常に難しい問題がある。

夢を大きなロマンの上にたった地域形成というA案と、地ぶりに近けばいいかなけりゃならない、そんな話を後でぶどう酒を飲みながらいつも話し合っています。

――小林氏

有難うございました。

最後、地域を考えるのに、ローカリティというのが大事だとよく言われます。

ローカリティと一口に言っても、その都市の特徴としてのローカリティ。その町の郷土とか風景としての ローカリティ。その町の持つ資源としてのローカリティ。色んなロ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]です、相隣関係がはっきりしています。

――会場から

[illegible]近の農業は全然知らない人ですが、土地の典型的な農家の生活規模はどの位なものなのでしょうか。

――平田氏

大変な話ですが、農地は[illegible]～13町歩、年収は1500万ぐらいというところでございます。

約600戸の農家のうち100戸が畜産専業でやっています。

農作業は昔は馬でやったものですが今は全部トラクターで、それも30馬力、100馬力という大型の物です。

畜産作業用に6月のトラクタ[illegible]ですし、トラック等[illegible]です、収穫機といった農機具に相当なお金がかかります。

農地は1反が約[illegible]～30万円ぐらいでしょうか、畑をやるにしても新規に農家を始めるには約1億円近いお金がいるようになります。

牛をやるとなれば、サイロ等を含めて3千万～4千万、牛舎のものが普通で1億60万～70万円、それが40～50頭は要りますから、何にする様な所ばかり安い地所を手に入れたにしても、やはり1億円くらいはかかると思います。

で、農業のところでは農地を40～50町に住宅、牛舎などを一緒につくって、酪農をやりたいというえにお悩ましてるんです。牛舎は牛50頭入る牛舎ですが、これを680万～750万円の牛舎[illegible]入って来ます。

ただ、牛だけは置いてきて下さい、という条件で現在10戸入っております。

まあ、補助金等でかなりそんな安い価格でやれるのですが、何故続らないのかと言いますと、個人が土地を持ってやると駄目になったらポンと売ってしまう、そうすると農業以外の資本に買い取られてしまうこともあるわけです。

そうはしたくない、だから借りだけで売らないでやっているわけなのです。

――会場から[illegible]

単協としてくれる様、その[illegible]ポクレンとかは安いというか立派というか、そう思う。

――平田氏

単協と酪農組合というのは[illegible]ばかりの会社農場みたいなもの[illegible]という価格で[illegible]ますが、ちょっと違います。

土地は[illegible]ば作れます。[illegible]して作るのが組合で、ポクレン、倉庫、貯蔵庫、[illegible]など色々ありますが。

八戸の大型のたいたいのものは組合ですが、[illegible]は[illegible]るんです、[illegible]、流通面、保険などが分かれている訳です。

何故一本化しないのか、まあ、俺い人の[illegible]ものも[illegible]ゆんでしょう。

そんな訳で、港湾といっても、情報程度くらいで、別に[illegible]される、[illegible]という

[illegible]

[illegible]

――[illegible]氏

[illegible]、阿波[illegible]、[illegible]（[illegible]）[illegible]と10[illegible]

[illegible]

[illegible]

う考えもあります。

土地といっても、都会の土地問題とは違いまして、土地というより土壌といいましょうか、そこから生まれる物に付加価値を高める、何でも加工しちゃえという動きです。

牛肉を例にとれば、ステーキにして売る、スライスにして、ハンバーグにして、完全調理したレトルトパウチ食品にして売る、そうする動きの上でもう部分も拡がっていくという動きです。

農業生産法人については、農業研修所というのがもう何年くらい続いています。

これは町がやっているのではなくて本当に農家の青年達がやっているんです。

ある面では遅いかも知れませんが、あまり今とり急ぎというやり方ではありません。

現在38名でしたか、大資金ではもう法人は諦めようかなどと思ったひどい打撃を受けたこともありましたが、その時、何人かに希望が残ってる人には「農業法人には本を買ってその会社を世界一周でも」と絵葉書を送れというのを進めたんです。

昭和40年から今迄、150名のうち完了されてますが脱落したのは2名だけです。

それから、若い人に、世界を見て、世界の中での地区を考えて欲しいと、早くから海外研修などは積極的にやっています。

農村の農家組織なども地区でもやっていないんです。

これは、皆様のうから、戦後ずっと見られるのは感がかなり強かったのですが、というのと、これからの農業をやろうとするのにこれくらい自分も係わらなくては、という考えも強くなってますが。

――千葉氏

私共のあり方は、自分の農業を新規にしていく、それがボロ会社になったものもかなり多く、1億円出して資本にしましたし、その他に補助金も貰ってやっています。

農業生産法人は大きな目的にやっていまして、国民に農業を理解してもらうのが第一でした。

大学を卒業して牛飼いをしたいと思ってやってきた人達もいます。農人、酪農、畜産、

――会場から大石氏

地図ののるに、何故主婦から機械全般に強くなければいけない農家に生まれたのは、母親さんでしょうか、農家の方でしょうか、町長でしょうか。

――大石氏

時を同じくしてみんなです。

ただし、その決断は後悔してはいないと言えると思います。

――峰山氏

個人という法はどこから。

――大石氏

やりがいがあるからです。

本当は直接民主主義をやりたいがそうもいかない、でも

――会場から峰山氏

[illegible]

――千葉氏

[illegible]

――会場から[illegible]

[illegible]

――千葉氏

[illegible]

――大石氏

[illegible]

――会場から大石氏

[illegible]

――峰山氏

[illegible]

――大石氏

[illegible]

――会場から峰山氏

[illegible]

――大石氏

[illegible]

――会場から峰山氏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て来る。

地域と行政とでみんなで、為7回でやったのですが、皆様は見になると急くなる。

いやしくも行政があるからは、は市清掃をしなければならないがろう、という問題がある訳です。

だが、問題は行政にあるとやっぱり簡単で出来ないなく、やはり、小樹の多さより、どうという話になるなければ解決人なる小樹人にはってを入れるんじゃないの。

大きな問題に、小樹人が増えに向って変りを持てるか、ということ、捨てれば、何も残り方なく、なれるだけの余裕を持くるかという事です。

その間で、市気にかったならばそれ迄の事がこんのお話しとして、生産性法をした。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
市はどうなるのかという事を
[illegible]と見誤のていきたいと思っ
てやっている訳です。

この講座を興味深いお話しが
[illegible]ありました。小林さん
とは、もうでしたしまゆ[illegible]
のスライドで見せて戴いたの
[illegible]、前回の池田町土[illegible]
[illegible]大変興味深く聞きました。
池田、北幌[illegible]
を生産している、これは[illegible]
だと思うんです。

小樽には[illegible]ない。[illegible]
小樽が[illegible]に出来得るのは何
かと考えると絶望だと思うん
です。

[illegible]だったため、[illegible]
というと[illegible]、その中で[illegible]
という考えがあった[illegible]ですが、
最近の行政の動きでは、[illegible]
[illegible]の育成という[illegible]が[illegible]
[illegible]、僕はこれは大事だと思
うんです。

お金[illegible]、お金[illegible]ない
技術があるし、手作りの[illegible]
[illegible]か、[illegible]とか、ユニークな
[illegible]もある。

こうした小樽に[illegible]
[illegible]
[illegible]これからの小樽の[illegible]
[illegible]ていく道ではないかと
思います。

[illegible]河保[illegible]の問題では、[illegible]
が町への自負心を失なった時
にはこうした歴史的環境は残
らない、住民が町への自負心
を持っている限り残っていく
と、全国の例を見ていていえ
ると思います。

できから小樽市民が街に誇
りを持っているかどうかが
大事です。

それから発想の転換という
[illegible]これからの時代には大変
必要なのではないでしょうか。

[illegible]でも街でも大きくなれ
ばなるほどひずみも大きくな
る、ふさわしい街なら[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ていきたいと思うんです。
去年のポートフェスティバルを私も陰からお手伝いしましたが、多の若い人達の力、盛りあがって集まったという事、素晴らしい事だと思うんです。
是非あれを続けていって欲しいと思います。

――今の話と関連するかどうかわかりませんが、小樽はいい川なんかを次々と破壊して来たと思うんですね。
他の都市では、川をキレイにしよう、もう一度鮭を、なんていってる訳ですが。
後藤先生が仰言る様に小樽は現実的経済人で、例えば、ソ連から観光客が入れば、本当面はノボリをたてて歓迎するでしょうが、あれも、これも、で論外、輸入が上手くいけばという事だと思うんです。
それから、バイパスの件ですが、バイパスはやはり街を迂回して通るものなんです。
観光客を通る山通りバイパスを、臨港線をやめて建設すべきと思います。

――石塚氏

なんか行政への陳情会みたいですけど、何とかも行政に押しつけるのは、住んでる人の責任の様な気もするんです。
倉敷は今でこそ有名ですが、あれは、大原さんという人がグレコの私設美術館を作ったり、自分の街を誇れる街にしようと住民が永い時間をかけてやって来て、それが現在の評価を生んでいる訳です。
池田町も出来ればワインで儲けようてんでどう作りをやり始めた訳ではなく、自分達の町を誇り得る環境にしていこうと始めたと聞いてます。
街づくりのエネルギーはそういう所からくると思うんです。
札幌から観光客とって来ようとかいった発想からやり方では、いい町は生まれないという気がするんです。
去年のポートフェスティバルは大変なエネルギーがこもった訳ですが、あれも自分の街を誇れるという基盤や、運河と石造倉庫という財産があったからこそ成功したんだと思うんです。
それを大切にしないで、例えば明日の街づくりが、ゼロを見ていますし、又それを無視して観光へ走るのも間違いだと思うんです。

――西尾氏

私、市の土木部長をしてまして、観光畑の方から、運河埋しの張本人と言われている訳ですが、今日は行政を代表して来ているのではありませんで、私個人の考えを述べさせて頂きます。
小樽は住みよい町だと思うんです。
これだけの人口集積があり、今ら町のすぐ傍に山があり、海があり、港が一望できる。
自然に恵まれているともいえるでしょう。
地震もなく、台風も直撃しない街、[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]のために小樽にて左様[illegible]ましたが、危機に[illegible]けて下さいました。

ご紹介するまでもなく、おお[illegible]れる先生です。

――おおぼた

おおぼたでございます。

僕は[illegible]で「小樽運河を愛する会」に入っています。

僕は色んな意味で小樽の[illegible]なんです。

小さい頃に母[illegible]に伴んだ事もありますし、兵隊で来た事もあり、僕の今迄の人生のなかで忘れて来た小樽があるかぎりです。

僕たち保存という事が全国的に注目され始めている訳ですが、小樽の場合は皆様のお[illegible]が、パワーを持って、明日の新しい小樽のために、という方向へ向っていると思っています。

僕もその面で協力を惜る訳です。

東京の集まりの時は皆さんのお耳に達していると思いますが[illegible]先生がーは[illegible]になって会長をやっておられます。

僕は運河周辺が好きですし[illegible]さんが[illegible]を中心としてやって、他は、[illegible]の[illegible]に小樽にマッチした小樽の個性を生かすようにやって頂ければと思います。

また、小樽の建物の絵を描いた豆本が出ました。

小さい豆本ですが、その中に小樽の良かいものが[illegible]された、という事はどんなパワーがあると思います。

僕は北海の生まれですが、札幌のレイアウトを考えると羨ましい点もあるんです。

でもやはり、20～30年後のビジョンを考えると、目をつぶって歩ける場合と、ぶつかりながらぶっかって歩ける場合とあるわけです。

皆さんは[illegible]ある向へいってらっしゃるかと思います。

そういう意味で、[illegible]ながらかすかな[illegible]思っています。

そんな事で、一寸[illegible]だけですが。

――金本氏(S)

前の話を続けるようですが、僕は[illegible]をどうするかというアイデアは今の所ないのです。

ただ、そこに道路がつくという事に、僕は[illegible]という感じがします。

小樽の[illegible]のラインという[illegible]という感じです。

運河も、[illegible]、[illegible]も[illegible]のライン。

ですが、[illegible]の人にとって[illegible]なのに[illegible]ライン[illegible]なのです。

ニューヨークのマンハッタンにも[illegible]があり、[illegible]たのですが、そこの[illegible]の中で[illegible]したのが、市気がいて[illegible]

[illegible]に線の道路を新しく造るなんです。

小樽の財産である海と山、これを間に結ぶ人間の歩ける道をつける事が大事なのです。

僕が問題にしてるのはそれを通る道路をつけてしまう事なんです。

予面ならなおさら、高架にしても、東京の日本橋の様な所を、高速の[illegible]を引き、[illegible]等を為にくぐる気にはなるない訳です。

その線の道路をつけるために[illegible]ちょっとしたら[illegible]、[illegible]なりしなければならないかも知れない、それでもいいと僕は思います。

先程の[illegible]の[illegible]した様に、散歩できる、そういう線の道路が残されればいいと思います。

観光は色々難かしい面がありますのですが、そういう[illegible]ものを[illegible]に供給するのであれば、観光も良くなる、[illegible]う。

で、僕は運河を通りを、海と住居、住居と山、この間に僕の道をつけたらいかがの方に[illegible]があるはずです。

――芳賀氏

水産高校の芳賀と申します。

長谷さんから[illegible]話がありましたが、やはり、自分達の街をどれだけ誇りに思うかという街づくりが先行しないと仰言る通りになると思うんです。

例えば、その核となる[illegible]

[illegible]達は考えている最中だと思っています。

そこで仮に、運河の主要な部分を道路にしてしまった後の事を考えますと、子供達に何故道路にしてしまったの、と聞かれても私は返答できない訳です。

今迄大事にして来たものをそのまま大事に子供達に渡してやりたい。

子供達がそれを誇れる様な街であって欲しい。

学校の教師のせいか、そんな風に感じる訳です。

ですから、当面のどういう様にするかという事と、次の世代に対してどう責任をとるべきか、という事、この両方の観点を入れてお考え頂きたいと思う次第です。

――北村氏

道路を造ったら小樽は経済発展するのだと良く聞くのですが、僕にはそうは思えないんです。

誰かそこを説明して頂えませんか。

交通需要があるから造るのであって、その需要を充たす事が小樽の市民所得にこの位効果がある、といった金の話として欲しい訳です。

――[illegible]氏

この臨港線が、例えば工場誘致のためという[illegible]道路でない事は申し上げてある訳で、現実に貨物や通勤などに困っている人達のために造る道路だという事です。

——[illegible]氏

私は、小樽はわざわざ車に乗らなければ買い物が出来ない町とは思わないんです。

かえって、どこかで車を遮断してゆうゆうと歩ける街にしたらと思う位で。

小樽の街をかけ歩いた所で知れてますよ。

——西尾氏

そういうふうにもらられるし、そうでないかもおられる訳です。

——

少なくとも、札幌から余市へ向う道まで臨港線に導入する訳になるのは望ましくないですね。

さっきも言いましたが、本当のバイパスを先に考えるべきでしょう。

——大島氏

僕なんかはここに集まっている中でも若輩なわけですけど、小樽の外から後から来られて来てると感じるんです。

で、僕たちの次の世代に残すもの、何が残っているか、そんな点に考えるんです。

これで運河さえ無くなったらと思うんです。

雪祭りもなくなったし、スケートリンクをなくなって。

——倉本氏(S)

今の話でちょっと間違ってると思うのは、雪祭りやスケートリンクがなければフィーバー出来てというのは違うと思うんです。

僕は札幌に住んでいて雪祭りもスケートリンクもあるけど、それはお金を払わないと入れてくれなかったり、子供に綿飴を買ってやらなければならなかったりで、自分で雪ダルマを作るのではない訳です。

それよりももっと言った様な車に邪魔されない緑の道路が出来れば、子供がソリや外スキーで滑れる。

その方がずっと素晴しい。

——大島氏

いや、僕が言ったのは、そうした冬の楽しみが、雪祭りにしろスケートリンクにしろ冬の時にはあったのに、何故無くなってゆくのかという事なんです。

——松本氏

話の流れとは直接関係ないのですが一言。

私は営林局に勤めていまして海とは関係ない山の仕事をしています。

小樽の山にも良く来まして山の上から港を眺めますが、港のまで問題があるというので勉強させて貰おうとこの講座に参加した訳です。

大変良い勉強になり、受講料も安いものだと思う位になりました。

緑の少ない街だ、というお話がありましたが、現実に少ないのですが、公務員の立場上、現実の緑の話はしない事にします。

と言っても、まるで触れないのも何ですから、多少宣伝がわりに、というのは歴史の話で、小樽の林業史のお話をしたいと思います。

小樽の方自身ご存知ない方が多いのに驚くのですが、小樽の林業というのは実に誇るべきものなんです。

特に植林は北海道の中の発祥の地と言っていい、港に劣らず輝かしい歴史があるんです。

小樽で色んな木を実験し生育させ、その樹木や技術を全道に広めていった訳です。

何故小樽で植林が始まったかといいますと、当時この辺の山はみんな禿山だったらしいんです。

そのせいで港に土砂が流れ込む、特に於古発川、色内川これはまるでベルトコンベヤーみたいな川ですから、それでこのままでは港が土砂で埋まるのではないかと問題になった訳です。

それで道庁が、山を治めないと港が保たない、と大々的な植林を始め、と同時に外海からの波を防ぐために防波堤の建設を始めた訳です。

ですから小樽の植林事業は港を守り発展させるための重要な施策だった訳です。

長橋の苗畑が北海道で一番古いんです。

そういう伝統や歴史を知って眺めれば、今迄ただのボロ山と見えたのも変ってこようというものです。

これも一つの郷土愛だと思うんです。

こうして港の方の事を皆さん一生懸命やっておられるのですが、たまにはふり返って山の姿を見て欲しいと思うんです。

小樽の景観の中、あるいは環境の中での緑の存在価値を見直して欲しいと思います。

平地の街とは違い、小樽は海から山を見上げる事も、山から街や港を見渡す事も出来る訳ですが、たまに山の上に立って、マクロの目でご覧になると皆さん何か新しい発見をなさるのではないかと思います。

——司会

有難うございました。

山の上から見直すと貴重なご提言を頂きましたが、本当にこれを機会に小樽を様々な角度から見直し、住み良さ暮し易さを失なわない方途を見つけていきたいと思います。

——嶋山（実行委代表）

長期間にわたっての熱心なご参加、本当に有難うございました。

運河問題というのは結局は、私達の生き方、人間の営みの在り方に関わる、大変大事な問題だと思います。

是非、またお話合いを重ねたいと思いますので、どうかお出掛け下さい。

保存運動にも積極的に参加して頂きたいと思います。

本当に有難うございました。

☆ ☆ ☆ ☆

昭和54年7月1日
頒布価格　780円

実行委員会代表
峰山富美
小樽市松ヶ枝2－5－32
TEL.　(0134) 23－6377